

---

# IS いちか君と一夏のIS学園生活

迷い人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS いちか君と一夏のIS学園生活

### 【Nコード】

N7769Y

### 【作者名】

迷い人

### 【あらすじ】

初めてISを機動させた時、原因は解らないが子供の姿になった一夏。ただISを機動させると本来の姿に戻る。子供の一夏…大人の一夏…。この一夏の状態の魅力に色々と振り回されるIS女性陣。波乱万丈の一夏のIS学園での生活が始まる。皆さんの作品を読んでいたら自分も書いてみたくなり挑戦してみました。未熟者ですがよろしくお願いします。

## いちわめ

『IS』…正式名称『インフィニット・ストラトス』

宇宙空間での活動を想定して作られたマルチフォーム・スーツ。しかしこのスーツは致命的な欠陥があった。『IS』は女性以外は使う事が出来ない。だが例外が出た。一人の男性が『IS』を動かしたのだ。その例外な存在、『世界で唯一ISを使える男』になった男性の名前は織斑一夏。彼自身それを望んだ訳ではないだろうが出来てしまった以上『IS』と関わった生活を余儀なくされるだろう。その点は彼も『IS』を動かした時点で覚悟は出来ていたかもしれない。だが予想外の事が彼の身に起きた。恐らく誰も予想しなかったことだろう。それは…

「全員揃ってますね！それじゃあSHRをはじめますよ」

黒板の前で微笑む女性副担任こと山田真耶先生。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

誰からも反応はない。教室の中は緊張感…ではなく疑問を感じてい

る女生徒ばかりだろう。真耶と、当の本人、以外は。

「そ、それじゃあ自己紹介を始めましょうか」

何とか場を和ませようとする真耶。妙な空気のまま自己紹介が始まった。順調に自己紹介が進んで行き遂にクラスの生徒達が疑問に思っている者の順番だ。

「え〜と、次は織斑一夏君」

「はい」

呼ばれた青年：いや、幼く可愛らしい男の子が教壇に向けて歩き始めた。年齢的に見て五歳か六歳くらいでIS学園の制服を着ていて半ズボンだ。

「織斑一夏です。よろしくおねがいします!」

一夏は頭をペコッと下げて礼をした。

「はい。上手に自己紹介が出来ましたね」

真耶は一夏の頭を撫でた。

「へへ…」

やや顔を赤くしながら照れた表情をしている一夏。二人は和やかな空間を作っているがクラスの女生徒達は困惑していた。一同こう思っているはず。何でここに子供がいる。と。そんな疑問を余所に二人が和んでいるとパアッ！と教室に音が響いた。そして真耶が頭を抱えて苦しんでいた。

「山田先生。生徒たちの前で何をなさってるの？」

すらりとした長身、過肉厚ではないボディライン。狼を思わせる鋭い吊り目。黒いスーツを着た女性が出席簿を持って真耶の背後にいた。先ほどの音は出席簿で叩いた音だろう。

「あつ、千冬お姉ちゃん！」

笑顔で千冬の元に行く一夏。

「自己紹介は出来たか？」

「うん！」

笑顔で頷く一夏。そんな一夏の頭を撫でる織斑千冬。若干、顔が緩んでいるように見えるのは気のせいか？千冬の人気は凄いもので、女生徒達が騒いでも不思議ではないのだが今は状況に付いて行けず啞然としていた。

「お、織斑先生。何で叩いたんですか？い、痛いです…」

涙を流しながら千冬に訴える真耶。

「生徒たちの前で惚気ているからです」

そう言いながら小さい一夏の頭を撫でながら緩んだ顔している千冬。

「すみません…（今の織斑君を見ると母性本能が撥られるですよね〜）」

そんなやり取りを千冬と真耶がしていると女生徒の一人が遂に質問をした。

「あ、あの〜先生方。聞きたい事があるんですが…」

「んっ？何だ言ってみろ」

「その…そちらのお子さんは一体…」

恐る恐る質問しながら一夏を指をさす女生徒。

「この子か？自己紹介したのだろうか？この子は織斑一夏。私の弟だ」

「えっ…？あの子って千冬様の弟…？」

「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていつ？」

「でも、年齢は私達と同じって聞いたけど…」

女生徒達がざわめく。

「君達もニュース等で知っていると思うが、この子は『世界で唯一ISを使える男』だ。ISを使える以上ここ、IS学園に入学をさせた」

「それはわかるんですが……」

女生徒達が一夏をチラチラと見る。

「君達の疑問はわかる。同年齢と聞いていたのにここにいるのは小さな子供だ。不思議に思うだろう」

女生徒達は一同に頷く。

「男なのにISを使えるためかどうかは原因不明だが、初めてISを起動させた後：そのまま体が子供になった。それに体だけでなく精神面まで子供になってな……」

「そ、そんな事があるの？」

「さ、さあ？」

女生徒達もISを使って体に異常が出るなど考えてもなかったせいか同様している。



「君達がISを使っても体に異常は出ない。この子が特例なだけだ」

「でもその…子供の状態で授業なんて受けられるんですか？」

女生徒の一人が質問する。

「ISを機動させれば本来の姿に戻る。それに子供の姿での記憶も本来の姿に戻れば反映される。頭は悪くはないから学科の方は大丈夫だろ。ダメな時は別に方法を考える」

「はあ…」と言いながら女生徒たちは頷く。

「君達は何も気にせずに訓練に勤しむように。この子が気になって訓練に集中出来なかったという言い訳は聞かん。いいな」

「まあ、千冬様がそう言うなら…」

生徒達は簡単に納得していく。いいのだろうか？

「それにあの織斑君を見ていると何か…」

「うん。母性本能を操られるというか…」

「半ズボン…」

女生徒達は小さくなった一夏を見て、顔を赤くする者、鼻息が荒くなる者、何故か手をワキワキする者など様々だ。などと話をしているとチャイムが鳴った。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはISの知識を覚えてもらう。その後の実習だが、半月で体に染み込ませる。よかるうがよくなかるうが返事をしろ。私の言葉には返事をしろ」

「はーい！」

子供になった一夏は自分が問題の中心になっているとは露知らず手を上げて元気に返事をする。そんな一夏を見た、教室にいる女性陣は…顔が緩んでいた。

一時間目のIS基礎理論授業が終わり今は休み時間。教室は異様なオーラに包まれていた。『世界で唯一ISを使える男』を見ようと廊下には他のクラスの女子、二、三年生の先輩達が詰めかけている。一夏を見に来た女生徒達はまさか一夏が『可愛い男の子』だとは思わなかったらしく驚いていたが、直ぐに可愛いから気にしないと言う事になり一夏を見ながら…個々に様々な反応をしていた。女生徒達は一夏に話しかけようとしているが互いに抜け駆けをしよ

うと思っっているためか、相手の出方を気にしていて膠着状態になっていた。

「…ちよつといいか」

この膠着状態を崩し一夏に話しかける女子がいた。髪型はポニーテール肩下まである黒い髪。身長は女子の平均的なものだろう。一夏は少し首を傾げて声をかけてきた女子を見ていると。

「あつ！ 箒お姉ちゃん」

一夏は笑顔になり箒と呼ばれた女子の足にくっ付いた。その時、室内なのに箒に落雷が落ちたように見えた。

「あつ、あゝ一夏。と、取りあえず放してくれ…（か、可愛い。抱きしめたい…い、いかん！ 冷静になれ！ この子は一夏なんだ。あの…私の…だが！ ああ、考えが纏まらない）」

顔を赤らめながら必死に緩む顔を我慢している箒

「箒お姉ちゃん」

小動物のように箒に懐き、子供特有の無邪気で無垢な笑顔で箒を見上げる一夏。再び箒に落雷が落ちたように見えた。

「か、可愛い！」

限界を超えたらしく箒はよだれを垂らしおもいきり一夏を抱きしめた。いつもの吊りあがった目尻とは違い目は逝っていた。鼻息も荒いようだ。

「ぐえっ！」

箒に力いっぱい抱きしめられ苦しむ一夏。箒の力が強すぎるためか一夏は苦しんでいた。

「あーっ！ズルい！」

「私も抱きしめたい！」

「次は私が！」

「私は別のことを……」

自分も一夏を抱きしめたいと女生徒達が言いだす。今の一夏の状態を心配してくれる人はいないようだ。

「ええい！一夏は今、私との時間を過ごしているんだ。邪魔をするな」

箒が吠える。しかし他の女生徒達も負けてはいない。ギャーギャーと言いつつ合っている。そうしているよ…

「うるさいぞバカ共が！」

いつの間にか教室にきた千冬が一喝する。

「さっさと席に着け。授業をはじめろ」

しびしび席に着きはじめる生徒達。ただ生徒達は口々に…

「次は私が織斑君を…」等と言っていた。

ふう…と息をつく箒。

(何とか一夏を守る事が出来た。この最高の癒しを！、ではなくて一夏の事に関しては他の誰にも譲りたくはない。一夏は…私の…)

「…はっ！」

(わ、私は、な、何を考えているんだ)

緩んだ顔ではなく、恋する乙女の顔から先刻までの吊りあがった目尻に戻る。

「さ、さあ一夏。授業が始まる。席に戻るぞ」

一夏に声をかけるが反応が無い。無反応の一夏を見ていると口から魂らしきものを出していた。

「い、一夏！一夏！どうしたんだ一夏！」

自分のバカ力…もとい自分のハグが原因で一夏が意識を失っているとは露知らず一夏に呼びかける筈。

「何をして…って一夏！しっかりしろ！保健室…いや、病院、いや、

ブラックジャックを…いや…」

混乱する千冬。いつもの威厳が全くない。

「きゃー織斑君！」

「しっかりして！」

「今、人工呼吸を！」

「それは私が！」

女生徒達も騒ぎ出す。世界で唯一ISを使える男だからか、それとも…とにかく騒ぎの中心にいるのは一夏のようだ。こんな感じで小さくなった一夏のIS学園での生活が始まった。

## いちわめく（後書き）

自分の考えた事を文章にするのは難しいですね。更新に時間がかかりそうです。ここに訪れたくれたみなさん。駄文ですがよろしくお願ひします。



だいにわめく（前書き）

いきなり4100アクセスもあるなんて驚きました。ISの人気の  
凄さを実感しました。訪れたみなさんありがとうございます。

子供の時の一夏は平仮名でいちか君と書きたいと思います。大人の  
時との状態を分かりやすくしたいので。

それと今回は短めです。すいません。

だいにわめ、

「ちょっと、よろしくて？」

「？」

物語が始まった早々、いちか君に声をかけてきた相手が出た。話しかけてきた相手は、地毛の金髪が鮮やかな女子だった。白人特有の透き通ったブルーの瞳が、ややつり上がった状態でいちか君を見ている。わずかにロールがかった髪はいかにも高貴なオーラを出している。その女子の雰囲気も『いかにも』今の女子という感じだった。今の世の中、ISのせいで女子はかなり優遇されている。優遇どころか、もはやいきすぎで女々しい構図になっている。そうになると男の立場は完全に奴隷、労働力だ。今では町ですれ違っただけの女性にパシリをやらされる男の姿なんて珍しくない。そういう時代の女子がいちか君の目の前にいた。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、はい。はじめまして、織斑いちかです」

ぺこっとお辞儀をして挨拶をするいちか君。

「これはご丁寧に。私はセシリア・オルコットですわ」

セシリアもお辞儀をして挨拶をした。

「って、そうではなくて。相手が子供だと、どうも調子が狂いますわね」

こめかみに手を人差し指で押さえながら、ふうとため息をだすセシリア。

「あの、セシリアお姉ちゃんは僕に何か御用ですか？」

首を傾げながらセシリアを見るいちか君。

「そ、そうでした」

コホンと咳払いをするセシリア。

「挨拶をしようと思いましたが、でも世界で唯一男でISを操縦できると聞いてましたから、少しは知的を感じさせるかと思ってました。がこんな子供だったとは。期待はずれですわね」

「すみません…」

やや涙目で謝るいちか君。

「ふん。まあでも、わたくしは優秀ですから、あなたのような子でも優しくしてあげますわよ。ひっ！」

クラスの女子達が殺気が籠った目でセシリアを見ていた。とくに篝の眼光は凄まじかった。篝や女子達がセシリアを睨むのは、可愛いいちか君を苛めている、と捉えられているからだろう。

「（な、なんでしょう。このアウエー感は何？）」

教室の空気にたじろぐセシリア。

「と、とにかくそういう事ですから覚えてくださいまし」

そう言って自分の席に戻るセシリア。

「だ、大丈夫かいちか？」

そう言って箒がいちか君に話かける。

「う、うん」

まだ涙目で頷くいちか君。

「いちか。男の子が人前で涙を見せるものではない」

「う、うん！」

涙を拭いて笑顔でこたえるいちか君。

「よし」

そんないちか君の頭を撫でる箒。

「（セシリア・オルコット。可愛いいちかを泣かせるなんて、斬らねばならないな。それにしても涙目だったいちか。あれはあれでいい…）」

顔が緩み目が逝ってしまった筈。そんな筈を見ていちか君は…

「筈お姉ちゃん怖い…」

怯えていた。

三時間目の授業は千冬が教壇に立っていた。

「さて、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとな」

「代表者てなんですか？」

いちか君が千冬に質問する。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席…まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

ざわざわと教室が色めき立つ。

「はい。織斑君を推薦します！」

女子の一人が手を上げて言った。

「私もそれが良いと思います」

他の女子も同じ意見のようだ。

「他にいないのか？だったら無投票当選だぞ」

「待ってください。納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いて立ち上がったのはセシリアだった。

「そのような選出は認められません！大体、こんな子供にクラス代表者を任せて良いと本気で思ってますの？」

『うっ！』と女子達は唸る。子供にクラス代表者を任せる事がマズイと思っているようだ。

「いいですか。クラス代表者は実力トップがなるべき、そしてそれは私ですわ！」

ドンドンとヒートアップするセシリア。

「それにこんな子供がISを使って戦闘をするなんて出来ると思いまして」

「出来るぞ」

「えっ？」

千冬が言葉を挟んだ。

「最初に言わなかったか？この子はISを機動させれば本来の姿に戻る。そのあたりに関しては問題はない」

「だ、だったら決闘をしましょう。勝った方がクラス代表者になると言う事で」

「だそうだが、いちかは良いか？」



可愛らしい顔とは違いやや大人っぽく、どこか逞しさを感じる顔で。

「うん！わかった。僕、戦うよ」

宣言するいちか君。

「織斑君。止めた方がいいよ。セシリアはイギリスの代表候補生だよ」

女子の一人が止めてくる。

「代表候補生って何ですか？」

「国家代表IS操縦者のことだよ。まあ、ISのエリートってところかな。だから実力も相当なものはずだよ」

「でも千冬お姉ちゃんが、男が一度言った事は変えちゃダメって言うってたから」

と先ほどの顔で止めてきた女子の方を見る。

「はづー！」

その女子は顔が真っ赤になり。

「先っきまでの可愛い顔とは違った良さが……」

「？」

「話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコットはそれぞれ用意をしておくように（先っきの顔を写メで撮りたかった……）」

ぱんつと手を打って千冬が話を締める。そして授業が始まった。ただ女子達は授業に集中出来てなかった。先ほどのいちか君のギャップに一同、萌えていた。そして毎度のことながら箒は顔が緩み涎をたらし。

「あの顔は反則だ……でも……良い……」

そんな箒を見ていちか君は……

「篝お姉ちゃん。やっぱり怖い……」

また怯えていた。

だいにわめく（後書き）

次回はセシリアとのバトルまで行きたいですね。そうしないと大人の時の一夏の出番が無いので。

次回もがんばりますのでよろしくお願いします。

だいさんわめ〜(前書き)

セシリアとのバトルまで話を続けるつもりが手前で終わってしまっ  
た。これも文才のなさでしょうか？

みなさんが楽しんでくれれば幸いです。では！

だいさんわめ〜

いきなりだがここIS学園は全寮制なのだ。生徒はすべて寮で生活を送る事が義務づけられている。これは将来有望なIS操縦者達を保護するという目的があるらしい。確かに、未来の国防が関わっているとなると、学生のころからあれこれと勧誘しようとする国がいてもおかしくはない。実際どこの国も優秀な操縦者の勧誘に必死だ。特にこの物語の主人公こと織斑いちか君は、今まで前例のない『男のIS操縦者』だから、各国の大使だの遣伝子工学研究所の人間など色々な連中が来るだろう。そんな連中からいちか君を守るために寮に入るのも当然といえる。そして今、いちか君は副担任の山田真耶と手を繋いでいちか君の部屋に向かっている。

「それでね…」

「そうですか…」

笑顔で一日の出来事を話すいちか君。それを笑顔で応える真耶。中睦まじい姉弟に見える。真耶が千冬以上に姉に見えるのは気のせいかな？ちなみにいちか君の着替えなど日用品は千冬が用意した。恐らく大金を使い特注の物ばかり用意したと思われる。

「え・と、ここですね。1025号室は」

真耶は部屋番号を確認してドアを開けた。

「はい。今日からここが織斑君のお部屋になりますよ」

部屋の中は、まず目に入るのは大きめのベッド。それが二つ並んでいる。恐らくそこいらのビジネスホテルのよりいい代物だろう。いちか君がベットの上で飛び跳ねていると。

「誰かいるのか？」

奥の方から声が聞こえてきた。ドア越しなんだろう、声に独特の曇りがある。部屋にシャワー室があるのでそこにいるのだろう。

「ああ、同室になった者が。これから一年よろしく頼むぞ」

部屋にあるシャワー室から出てきたのは今日再会を果たした幼なじみだった。相手が女子だと思ってそのままの恰好で出てきたのか、箒はその体にバスタオル一枚を巻いただけの姿だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

きよとんとした顔の箒。

「い、い、いちか・・・？山田先生？」

「あつ、篝お姉ちゃん」

「こんなタイミングで来てすいません、篠ノ之さん」

「あ、いえ、お構いなく、ではなくて・・・」

状況について行けず混乱する篝。

「何故、いちかと山田先生がここに？」

「えつとですね、織斑君もこの部屋で生活する事になります。つまり篠ノ之さんのルームメイトは織斑君です」

「へ？」

なびに混乱する篝。



「本当は年頃の男女が同じ部屋と言うのは良くないですけど、今の織斑君の状態で一人にするのは色々と不安なので」

「はあ…」

「織斑先生との相部屋も考えられたんですけど、教師と生徒が同じ部屋というのも良くないですから。そんな時、篠ノ之さんが織斑君と幼なじみだと聞いたので、良くはないですが織斑君の事を任せようという事になりました」

「そんないいかげんな…」

「篠ノ之さんも急にこんな事を言われて困るでしょうけど、そこを何とかお願いしたいんです」

頭を下げる真耶。

「う、んー」

悩む筈。さすがに子供の姿だといえ、好きな異性と相部屋というのは悩むようだ。そんな時…



「い、いちか。ちょっと待っていてくれ。服を着てくる」

急いで服を着る筈だった。服を着た後、お互いベットに座りこの部屋での線引きについて話そうとしたが…

「……………」

子供の体の為かいちか君はおねむの様だ。うつらうつらとしている。

「仕方がない、もう眠るぞ。いちか」

「…ん」

意識が朦朧としているのか、返事もはっきりせずそのまま眠ってしまった。

「仕方がない奴だ」

いちかに布団をかける筈。

「さて、私も眠るかな…」

ここまでは普通だったが何故か、いちか君と一緒にのベッドで眠る  
筈。

「（一夏と同じ部屋というのはその…色々とな…あるが、嬉しくもあるな）」

筈の表情は照れたような、恋する乙女の表情のようだ。

「（それに小さいいちかとの生活というのも…イイ！）」

先ほどの恋する乙女の表情とは違い、顔が緩み目が逝っていた。鼻息も荒い。

「う、うん。筈お姉ちゃん怖い…」

夢の中でも、逝った筈に怯えるいちか君だった。

とある別の部屋。そこに織斑千冬が椅子に座り携帯を使って誰かと話をしていた。

「で、一夏が何故幼児化したのかわかったのか？」

「んゝさすがに東さんでも、直ぐには分からないですな。情報が少な過ぎるからねゝ。いつくんを私に預けてくれれば直ぐにでも…」

電話の相手は篝の姉にしてISの製作者：篠ノ之束のようだ。

「却下だ」

「ちーちゃんはずれないね。東さんも小さいいつくとスキンシップをしたいよゝ」

「いちかが汚れる」

「酷いなゝ。まあ、ちーちゃんはいつくんLOVEだから仕方ないかな。わー待って待って、切らないで！」

千冬が電話を切ろうとしたのをわかったらしく止めにはいる。

「とにかく一夏の件、調べておけ」

「了解。あつ、それとちーちゃんに一言だけ言っておくことがあるんだ」

「何だ…」

「いつくに色々な衣装を着せて、その…」

千冬は電話を切った。

「アイツは何を言っているんだ」

部屋に置かれている大量の衣装ケースを見ながら。

「そんなのは当たり前だろう」

いちか君にどの衣装を着せるか吟味を始める千冬。この人は本当に伝説のIS操縦者と言われた人なのだろうか？

翌日朝の八時。食堂でいちか君と篤は朝食を食べていた。ちなみにメニューは和食セットだ。

「ねえねえ、あの子が噂の子だった〜」

「何でも千冬様の弟らしいわよ」

「小さい手でがんばって箸使っている姿。可愛い…」

いちか君を珍しがるのは昨日から変わらないようだ。周りの女子が一定の距離を保ちつつも、『興味津津ですよ。でもがつつきませんよ。そして萌えてます』という状況だった。

「お、織斑君、隣いいかな？」

「はい？」

声が出た方を見ると朝食のトレーを持った女子が三名、いちか君の反応を待ちわびる如くたっていた。

「はい。どつぞ」

声をかけてきた女子は安堵のため息を漏らし、後ろの二人は小さくガツポーズをしている。周囲からは何か妙なざわめきが聞こえた。

「あゝっ、私も早く声をかけておけば！」

「まだ、まだ二日目。焦る段階じゃないわ」

「そ、それよりいちか君の部屋って何処かわかった？」

「山田先生が案内してたっという情報しか…」

いちか君の部屋の情報はまだばれてないようだ。

「うわ、織斑君って朝すっごい食べるんだ」

「子供なのに」

「お姉さん達はそれだけしか食べないですか？」

「わ、私達は、ねえ？」

「う、うん。平気かな？」



「お菓子よく食べるし！」

等と話しているよ。

「いちか。私は先に行くぞ」

「あ、はい」

食事を済ませた筈は席を立って行ってしまふ。何か機嫌が悪そうに見えた。

「織斑君って、篠ノ之さんと仲がいいの？」

「はい。幼馴染ですから」

「そ、そうなんだ」

「それに同じ部屋です」



「いちか。ゆっくりでいいから、よく噛んで食べるんだぞ」

「うん。千冬お姉ちゃん」

微笑ましい姉弟のやり取り？そんな二人のやり取りを聞いていた女子達は『何か理不尽』と思っていた。

三時間目の授業の時、少し問題？が起きた。ISの授業をすれば必ず篠ノ之 束ゆづの名前が出てくる。そうなると妹である篤に話題が行く。そして姉の事を聞かれると大声を出して話を終わらせてしまった。そのせいか教室の空気がやや重いものになっていた。

「さて、授業を続けるぞ。と、そういえばいちか」

「はい。千冬お姉ちゃん」

「いちかのISだが準備まで時間がかかる」

「？」

「予備機がない。だから、少し待ってくれ。学園で専用機を用意させる。出来ないと言われてもさせる」

「それって政府からの支援が出てるって事」

「いいなあ…私も専用機欲しいなあ」

女子達がそれぞれ羨ましがる。

「話は終わりだ。さあ、授業をはじめろぞ」

女子達の話が終わらせ授業をはじめると冬だった。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

休み時間、早速いちか君の席にやってきたセシリアは、腰に手を当ててそう言った。

「はい。僕も安心しました」

笑顔で応えるいちか君。

「（やっぱり、調子が狂いますわ。それに…）」

セシリアも前回のアウェー感を味わいたくないのだろう矛先を箒に変えた。

「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですからね」

「妹というだけだ」

束の事を聞かれたせいか、鋭い視線ですごむ。

「（また、いちかを泣かせる気が…）」

束の事ではなかったようだ。

「ま、まあ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

ぱさっと髪を手で払ってきれいに回れ右、そのまま立ち去っていつ

た。この後、いちか君は箒と一緒に昼食をとった。子供なのに箒がクラスで浮かない様に気を使ったようだ。途中、三年生の女子に話かけられいちか君にISについて教えてくれようとしたが、箒が放つONE PIECEの覇王色の覇気に威圧され気を失った。箒には王の資質があるようだ。

「箒お姉ちゃん」

「なんだ。いちか」

「僕、ISを上手に動かせるようになりたいから、僕を鍛えてほしい」

「急だな。しかしだな…（小さいいちかを鍛えて本来の姿に戻った時に鍛えた効果があるのだろうか？そもそもこの可愛い、いちかに敵しくするなんて出来るだろうか…）」

「箒おねえちゃん。お願い」

いちか君スマイルが炸裂した。

「よし、わかった。今日の放課後、剣道場で」

威力は絶大で悩む筈を一撃で陥落した。

「（よく考えれば、いちかとの二人の時間が増えることになるな。これはこれで良いか。放課後、いちかと二人きり…）」

顔が緩み鼻息も荒くなる筈。

「この時の、筈お姉ちゃん怖い…」

この時の筈に怯えるのは定番化してきているようだ。

いちか君との特訓の後、道場で着替える筈。

「（小さくなくても体が剣道の事を覚えているのか、素振りをさせても技術がしつかりとしていたな）」

いちか君との特訓を思い出す筈。体が子供のなので厳しい鍛練をするわけにはいかないので素振りなど基礎的な事をした。

「（しかし、小さいいちかが素振りをしてる姿を見ると昔を思い出すな）」

思い出に浸る筈だった。

「（小さいちかも良いが、大きくなった一夏とも会いたいな。まだニュースで流れた写真でしか見た事がない。テレビで出た一夏は、その、まあ、格好いいと思う。そして…）」

頭に巻いた手ぬぐいをほどき、髪に触れる。長く伸びたそれは、後ろでくくつてもまだ腰近くまで届くほどだ。

「（よく私だとわかったものだ…）」

六年もの時間が過ぎて一夏自身、体に異常が起きているのに直ぐに筈だとわかってくれた。筈はそれが妙に嬉しかった。

「（髪型を変えなかった甲斐があったというものだ）」

些細な偶然にすぎるような、あるいは願掛けに期待するような、そんな甘い考えが多小なりともあった。筈も十五才の春を迎えた恋する少女である。

「（明日から放課後は特訓だ。いちかと二人きりになる口実が出来



た」

更衣室で一人、握り拳を作って気合をいれる筈だった。

そして翌週、月曜。セシリアとの対決の日。

「筈お姉ちゃん……」

「何だ、いちか」

「僕さ……」

「ん？」

「僕さ、剣道の訓練ばかりでISの訓練をしなかったけど、いいのかな」

「し、仕方がないだろう。お前のISがなかったかのだから」

「うん。そうなんだけど……」

いちか君専用のISはとやらは何かごたついていたらしく、結局来ていない。そう、今も来ていない。とその時…

「お、織斑君織斑君織斑君！」

第三アリーナ・Aピットに駆け足でやってきたのは山田先生だ。その後ろに千冬もいた。

「ついに来ました！織斑君の専用IS！」

「！」

「いちか。すぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られている。ぶつつけ本番でものにしろ」

「え？」

「この程度の障害、男子たるもの軽く乗り越えてみせろ」

「え、え？」

「早く」

そう言われ、そのままピット搬入口まで連れて行かれるいちか君だった。そして搬入口の奥にあったのは…

そこには『白』がいた。

白。真っ白。飾り気のない、無の色。眩しい程の純白を纏ったISが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

「これが僕の…」

「はい！織斑君の専用IS『白式』です！」

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間が無いからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ」

せかされて、いちか君は純白のISに触れる。

「あ…」

少しぼくとするいちか君。

「何をしている。背中を預けるように座る感じでいい」

「千冬お姉ちゃん……」

いちか君は千冬達の方を見て

「背が届かないし、体にあわない……」

「「「……………」」」

三人とも絶句した。確かにそうだ。本来の姿は十五才でも今の姿は五・六才位の体なのだから。

「ど、どうしましょう。お、織斑先生！」

慌てる真耶。

「む……」



やっと本来の姿になった幼馴染は男らしい顔だちになっていた。生意気だけだった瞳は、わずかだが大人の男を感じさせるものに変わっていた。そんな一夏の姿に見惚れる筈だった。

「えっと…その、な…小さくなった俺の面倒を色々と見てくれてありがとうかな…」

「あ、いや、そ、その、幼馴染なんだ。そんな事は気にするな」

「あ、ああ」

何でしょうこの空気は？

「そ、それとな筈」

「な、何だ？一夏」

「小さくなった俺の面倒を見てくれるのはありがたいけどな、その…一緒のベットに眠たりするのはちょっとな…。千冬姉が言っていたと思うけど、小さくなった時の俺の記憶は今の俺に反映されるわけでその…な」

赤くなりながら言う一夏。

「え・・・・・・・・・・はっ！○×　　¥」

真っ赤になった箒は全身から湯気をだしているように見えた。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

互いに真っ赤になり沈黙する二人。だからこの空気は何だろう？そんな雰囲気壊す音がした。

パンツ！

「痛た！」

「これからISを使って戦うのに何をしているんだ？お前は」

凄く不機嫌そうな千冬が何故か持っている出席簿で一夏を叩いた。

「ち、千冬姉。俺IS装備しているのに何でこんなに痛いんだ？」

頭を押さえて千冬に質問する一夏。

「それは私の技があればこそだ」

「……………」

何と言う理由。しかし何故か納得できる理由。千冬の技はISのバリアーをも貫けるのか。

「時間が無いんだ。さっさと行って来い」

「わかったよ……」

ゲートに向かう一夏。

「第」

「な、何だ」



「行ってくる」

「あ…ああ。勝つていい」

その言葉に首肯で応えて、一夏はピット・ゲートに進む。遂に一夏の戦いがはじまる。

## だいさんわめ〜(後書き)

今回は初の戦闘シーンです。原作以外の戦闘の表現をするつもりですが上手く表現できる自信はありません。  
とにかくがんばりますのでよろしく願います。

だいよんわめく(前書き)

更新が遅れました。すいません。

一夏が中途半端なチートになりました。支離滅裂な点もあると思いますがそこはスルーしてください。

だいよんわめ〜

アリーナの観客席に一夏のクラスメイトはこれから始まる試合を見るため集まっていた。

「いちか君にはがんばってもらいたいけど、相手が悪いよね」

「うん。イギリスの代表候補生だもんね…」

「いちか君が怪我をしなければいんだけど…」

「セシリアも子供相手なら手加減をしてくれるでしょう」

などと一夏が勝つとは誰も思っておらずいちか君が怪我などしないかの方が気になるようだ。

「あつ、ゲートが開くよ」

両方のゲートが開き始めた。そして片方のゲートから現れたのはセシリア。鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』。その外見は、特徴的なフィン・アーマー四枚背に従え、どこか王国騎士のような気高さを感じる。対するは…

「ね、ねえ。あの、いちか君って…」

「小さくないよね…。ということは千冬様が言っていた…」

「あれが本来のいちか君の、いや織斑一夏君の姿…」

「……………はぁ……………」

クラスの女子達は『白式』を纏った本来の一夏の姿に見惚れていた。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻を鳴らす。腰に手を当てたポーズが様になっている。そしてセシリアの手には二メートルを超す巨大な銃器が握られていた。ISは元々宇宙空間での活動を前提に作られているので、原則空中に浮いている。そのため自分の背丈より大きな武器を扱うのは珍しくない。アリーナ・ステージの直径は二〇〇メートル。発射から目標到達までの予測時間は0・四秒。すでに試合開始の鐘は鳴っているので、いつ撃ってきてもおかしくはない。

「貴方のその姿を見て安心しましたわ」

「？」

「私、子供を痛ぶることなんて出来ませんの。そんな事をすればオ  
ルコット家の恥ですわ。その姿なら遠慮なくいけますから」

「そうかい……」

「貴方に最後のチャンスをおあげますわ」

腰に当てた手を一夏の方に、ぴつと人差し指を突きだした状態で向  
けた。左手の銃は、余裕なのかまだ銃口が下がったままだ。

「チャンスって？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ボロボ  
ロの惨めな姿を晒したくなければ、今ここで謝るといふなら、許し  
てあげないこともなくてよ」

そう言って目を笑みに細める。警戒、敵IS操縦者の左目が射撃  
モードに移行。セーフティのロック解除を確認。ISが告げる情  
報を確認する一夏。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？残念ですわ。それなら…」

警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー装填

「お別れですわね！」

キュインッ！耳をつんざくような独特の音。それと同時に走った閃光が刹那、一夏の体を撃ち抜くはずだった。

「えっ！」

閃光はそのまま一夏をすり抜けていった。

「な…あ、あれを避けるなんて少しは出来るようでわね。でも結果は変わりませんわ。さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

射撃、射撃射撃射撃。まさに弾雨のごとき攻撃が一夏に降り注ぐ。しかも、それらすべてが的確に一夏を狙っている。普通なら凌ぐのですら難しい。しかし、その攻撃はすべて一夏をすり抜けていく。

「いったいどういう事なんですか？わたくしの射撃が当たらないなんて」

ピットでリアルタイムモニターを見ている篤、千冬、真耶。

「織斑先生。一夏を狙った射撃がすり抜けていくのは、ISの機能ですか？」

千冬に質問する篤。

「いや、あれは単に避けているだけだろう。射撃が当たる瞬間に高速でそれも紙一重で回避しているな。ただあまりの速さに回避しているように見えず、すり抜けているように見えるのだろう。あれならシールドエネルギーを殆ど使わなくていいだろうな。オルコットからしてみれば亡霊か何かと戦っている気分だろうな」

「織斑先生は一夏にそんな技を教えたのですか？」

「いや、何も。ISでの戦闘もこれが初めてのはずなんだが。正直、



私も驚いている」

「なるほど。反逆ルオーシユLOST COLROSSのラオと同じ技を使っているんですね。わかります！」

拳をグツ！と握りモニターを見る真耶。

「「何がわかったのだろうか？」」

千冬と筈は思った。

戦闘中の一夏とセシリア。セシリアは四つのビットも使い一夏に向けて射撃をするがまだ、一撃も当たってない。

「（あれだけ撃てばエネルギーを幾分か消費したはず…）」

そう思いながら『白式』のエネルギー残量を確認する一夏。

「（よし、こっちのエネルギーは大丈夫だ。そろそろ攻めるか。でも上手くいくか…）」

白式の展開可能な装備を調べる一夏。

「一個しかないのか…」

『近接ブレード』と書かれた装備しか表示されていない。

「やってみるか！」

一夏は近接ブレード《名称未設定》を呼び出し、展開する。キィイン…。高周波の音とともに、一夏の右腕から光の粒子が放出される。それは手の中で形となって、収まった。片刃のブレード、渡り一・六メートルはある長大な『刀』が一夏の武器。

「中距離射撃型のわたくしに近距離格闘装備で挑もうなんて…笑止ですわ！」

「そう言っけどまだ一発も当たってないぜ」

「お黙りなさい！」

すぐさまセシリアの射撃。しかし一夏をすり抜けていくだけだった。

「（くそ！一次移行も終えていないからか、『白式』の反応が鈍い。セシリアとの距離は二十七メートル。一気に距離を詰めたいがそれが出来ない。無理に距離を詰めれば…避けることが出来ず直撃か）」

セシリアも焦っているが一夏も内心焦っていた。

「（でも、距離を詰めればこちらが優位だ。セシリアは自分でも中距離射撃型と。近接格闘の間合いで、あの長大なライフルが役に立つとは思えない。それに見えている限り近接用の装備はない。強引に攻めてみるか）」

一夏は一気に距離を詰めようとした。

「させませんわ！」

セシリアの射撃の勢いが増した。ビットからの射撃も凄いものだ。

「（行ける。後は集中するだけだ。篝との放課後の特訓が生きてきた。集中は、剣術の究極にして基礎だからな）」

段々距離を詰める一夏のスピードが上がってきた。

「（しかし、箒には感謝だな。特訓の事もだけど小さくなった俺の面倒を見てくれて。幼馴染というのもあるかもしれないが…）」

戦闘中に箒の事を考える一夏。

「（初日には箒に抱きついたっけ。いや、抱きしめられた？そして同じ部屋になって…）」

初日からの箒にとのやり取りを思い出す一夏。

「（箒に…もらったり、箒に…したり、箒と一緒に…たり、箒と、箒と、箒と、箒と、箒と…）」

段々と一夏の顔が赤面してきた。

「（うわあああああああああああああああああああああああああああああああ  
あああああ！）」

両手で頭を抱える一夏。顔から湯気が見える？よつな気がする。

「（俺って何をしてるんだ！いくら子供の姿で精神も幼児化してい

てもあんな事やこんな事をするなんて！それに何か凄い事を言った  
ような気もする。やべ。俺、篝の顔を見れない」

さらに赤くなる一夏。白式が赤く見えてきた。某専用のMSのよう  
だ。

「隙ありですわ！」

「あっ…」

羞恥心で頭を抱えていた一夏をビットが取り囲んでいた。いつの間  
にかビットの数が六機に増えていた。しかもレーザー射撃タイプと  
は違うようだ。これは『ミサイル』だ。そして…

ドカアアアアアアンツ！

一夏は爆発と光に包まれた。

「一夏っ…！」

モニターを見ていた篝が思わず声を上げた。

「ふん…」

黒煙が晴れた時、千冬は鼻を鳴らした。けれどその顔には安堵の色がある。

「機体に救われたな、馬鹿者め（よかった。一夏は無事の様だ。もし一夏に何かあればオルコットの奴、退学だけではすみませんぞ）」

ブラコンで国家問題を起こしかねない千冬だった。と、それは置いてかすかに漂っていた煙が、弾けるように吹き飛ばされる。そしてその中心には、某専用…ではなく純白の白い機体があった。そう、真の姿で…

「フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボタンを押してください」

一夏の意識に直接データが送られてくる。と同時に、目の前に現れるウィンドウ。真中には『確認』と書かれたボタンがある。一夏はそのボタンを押した。そうするとさらに膨大なデータが流れて込んできた。いや、正確には整理されいるのだろう。そして変化は劇的に訪れた。

キイイイイイイイイン！

高周波な金属音。刹那、一夏の全身を包んでいる…いや、一夏の身  
そのもののISが光に粒子に弾けて消え、そして形を成す。

「これは…」

新しく形成されたIS装甲はまだうすぼんやりと光を放っている。  
そして先ほどより洗練された形へと変化していた。

「ま、まさか…一次移行？あ、あなた、今まで初期設定だけの機体  
で戦っていたって言うの」

そういう事だ。『最適化』が終わり、やっと白式は一夏専用になっ  
た。機体のデザインも変わったが、何より変わったのはその武器だ  
った。

『近接特化ブレード・《雪片式型》』

その名前はかつて千冬が振るっていた専用IS装備の名称。刀に型  
成した形名。それが雪片。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

「は？」

「守られるだけでなく、今度は俺が守らないとな」

「は？あなたは、何を言って…」

「私的な事だよ。でも今回は…」

「何の話を…ああもう、面倒ですわ」

「夏に向かってビットが飛んで行く。」

「（見える…）」

「夏は雪片式片を構えて。」

「セシリア・オルコット！」

「？」



「下手に動くなよ。まだ手加減が出来そうにない」

そういと雪片式型に光の粒子が集まり刀身が光輝いた。そして一夏は縦一閃に振り抜いた。そうすると刃先から超高密度のエネルギーを斬撃として放出されビットを斬り裂いた。

「なっ、何ですか?」

焦るセシリア。

モニターを見ている筈達。

「あ、あれはいったい何ですか?」

「ああ。あれは…」

「BLOACHの月牙〇衝ですね。わかります!」

両拳をグツ!と握りモニターを見る真耶。

「（だから何がわかったのだろうか？）」「

二人ともそう思うのだった。

そして一気に距離を詰めるためセシリアに突撃する。機体の瞬間速度、センサー解像度はさっきまでの比じゃないようだ。反応の鈍さなど微塵も感じない。そしてセシリアの懐に飛び込んだ一夏は、もう一度月○天衝？のようなものを放つため全エネルギーを一気に集中した。

「きゃあ」

セシリアは目を瞑り身構えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

が、その斬撃がセシリアに当たる事はなかった。なぜなら……

『試合終了。勝者…セシリア・オルコット』

「えっ……」

セシリアは何故勝ったのかわからず困惑していた。それはアリーナで観戦していたギャラリーもモニターを見ていた筈、真耶も同じだった。

「おめでとう。セシリア」

一夏は笑顔でセシリアを称えた。

「あいつ、わかっててやったな……」

千冬は「やれやれ」という顔をして意味あり気な事を言う。試合結果は……一夏の負け？のようだ。

## だいよんわめく(後書き)

次回からセシリアにもフラグが成立しますが、いちか君への対応をどのようにするか悩んでいます。可愛さに振り回されるのは考えてますが等とは違う対応を考えてます。ここまで読んでくれてありがとうございます。

## だいごわめ〜（前書き）

なんだかプライベートで忙しくなり、更新が遅れがちです。何とかがんばりますのでこれからもよろしくお願ひします。セシリアファンのみなさん、すいません。何かセシリアのキャラが変になりました。

だいごわめ〜

セシリアとの戦闘を終えてピットに帰る一夏。

「お待ちなさい！」

「ん？」

その一夏を呼び止めたセシリア。

「あなた、ワザと負けましたわね！」

激昂するセシリア。無理はないだろう侮蔑した相手に情けをかけたのだから。

「（ああ…やっぱりバレたか）」

戦闘中にシールドエネルギーも消費していないのに残量が0になるはずがない。

「最後の一太刀、全エネルギーを雪片式型に集中させて、そのまま

拡散した」

「何をしたなんて、どうでもいいですわ！わたくしが聞きたいのは何故ワザと負けたかですわ！」

「そこですか…」

自分の頬を人差指でポリポリとかく一夏。

「返答によつては…」

セシリアは長大な銃器、《スターライトmk?》を構えた。

「理由は二つ。一つ目はクラス代表なんて俺はやりたくない。二つ目、これが一番の理由かな。小さい俺も同じ考えだ」

「それは、何ですの…」

「セシリアに認めてもらいたかったからかな」

「は？」

「今が女尊男卑社会だからかな。セシリアって男を下に見ているところがあるだろ。それと男を嫌っているようなところもあったかな」

「（男ではなく情けない男ですけど…）」

「俺が男だからって理由で俺の実力を測られなくなかった。それに嫌われなくなかった。だからまずは全力で戦って俺の実力を知ってもらいたかった」

「そして私より強い事を証明して、そしてワザと負けて情けをかけた侮蔑した私を嘲笑しようか？」

「そんな事はしない。さっき言ったろ？セシリアに認めてもらいたかったって」

「何を認めるというのですの」

「ISの技術を競い合い高め合う《ライバル》として、そしてこれからIS学園で同じ時間を過ごす《友達》としてさ…」

「はっ」



セシリアは何を言われたのか一瞬理解が出来なかった。

「（え、えつと、何て言いましたの？た、確かライバルと言ったよ  
うな…ま、まあそれは置いて、と、友達と言われたような…つ、つ  
まり、わ、私と、と、友達になりたいと？）」

動揺するセシリア。

「それにしても、セシリアはやっぱ強いな」

「はへ？（こ、今度は何ですの）」

変な返事をするセシリア。

「先っきの戦いは、セシリアの油断があったからあそこまで戦えた  
けど、それがなく、最初から本気で戦っていたら俺は負けていたな」

千冬なら油断する時点で駄目だと言いきうのだが。

「えっ？」

「イギリスの代表候補生ってのは伊達じゃないな」

「と、当然ですわ」

「やっぱり、代表候補生として背負っているものがあるからか？セシリアと戦っている最中に見つけたぜ。俺が背負うもの…守りたいものをさ。だから俺は強くなるぜ」

そう言って一夏はセシリアを見る。強い意志の宿った瞳で…

「……………」

セシリアはただそんな一夏に見惚れていた。

「そういえばこの姿で会うのは初めてだな。じゃあ遅いけど改めて自己紹介するな。俺は織斑一夏。小さい俺、共々よろしくな」

そう言って一夏は笑顔で右手を差し出した。

「…あ…い…」

何を言ったか聞こえないくらいの声で返事をして、おずおずと手を出して一夏と握手をするセシリア。

「よ、よろしくですわ…」

もはや、先ほどの激昂したセシリアの姿はなく、しおらしくなっていた。

「ん？」

白式が三人の生命反応を感知した。どうやら箒達のような。中々帰って来ないので様子を見に来てくれたのかもしれない。

「っ！」

一夏は小さい自分と箒とのやり取りをまた思い出し、真っ赤になった。

「（だ、ダメだ。今は箒の顔をまともに見えない。心が落ち着くまで一旦引こつ）」

一夏がセシリアと手を離すと。

「あ………」

名残惜しそうに離れた手を見るセシリア。

「じゃあ、またな！」

そう言うと一夏はISを停止させ、一夏からいちか君になった。

「一夏！」

いちか君になったその時箒達 came。

「箒お姉ちゃん〜」

箒の所に走って行くいちか君。

「あ、ああ。いちかお疲れ様。（もう一夏からいちか君になったの

か。一夏ともつと話をしたかったのに…」

「いちか君お疲れ様です」

真耶が労いの言葉をかけてくれる。

「よくがんばったな…（ワザと負けた理由を聞こうと思ったのだがな。まあ、大体の理由は想像がつくがな）」

そう思いながらいちか君の頭を撫でる千冬。それにしても千冬はいちか君には甘いようだ。

「えっと、ISは待機状態になってますけど、織斑君が呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと読んでおいてくださいね」

資料を渡す真耶。少しISの事を説明するとISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリーの形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス。いちか君は何故か…ヒマワリを模った名札だった。平仮名で『いちか』と書かれている。裏面には迷子になった時の連絡先まで書かれている。白式の親切設計なのか？というかこれは誰かに盗まれるような気がする。

「今日はおしまいだ。帰って休め」

「はい…」

何処か呆けているセシリア。

「「（一夏と何かあったな…）」」

女の感でセシリアの様子が変な事に気がつく筈と千冬。

「バイバイ〜セシリアお姉ちゃん〜」

手を振るいちか君。

「はい！さよならですわ」

急に笑顔で手を振り自分のピットに帰るセシリア。

「「（絶対に何かがあった！）」」

確信する二人だった。

寮への帰り道、いちか君と箒は手を繋いで歩いていた。

「いちか」

「何、箒お姉ちゃん」

「その、なんだ…負けて悔しいか？」

「……………」

無言になるいちか君。ワザと負けましたとは言えないようだ。

「うん。悔しいよ…」

「そ、そうか…」

箒は一夏がワザと負けたのは気がついてないようだ。

「あ、明日からは、あれだな。あ、ISの訓練もいれないといけ  
いな」

言葉を続ける箒。どうもよそよそしい。そわそわしているよいうか…

「箒お姉ちゃんはISの操縦を教えてくださいの？」

「む、無理にとは言わないぞ。なんなら、千冬さんに教えてもらっ  
たほうがいいのではないか？」

「ん〜千冬お姉ちゃんは嫌がると思うよ。えこひいきと思われちゃ  
うし」

多分いちか君が頼めば千冬は迷うことなく了承すると思う。どんな  
に反対されても…

「そ、それなら先輩にでも教えて…（だ、ダメだ！そんな事をすれ  
ば、い、いちかが先輩達の毒牙に！）」

変な妄想をする箒。

「箒お姉ちゃんが嫌だったら…」



「い、嫌とは言っていない！」

びっくりするいちか君。

「そ、その…い、いちかは私に教えて欲しいのだな…」

「うん！」

笑顔で頷くいちか君。

「そ、そうか…そうかそうか。なるほどな。ふふっ、仕方がないな」

急に嬉しそうにする篤。よほど嬉しいのかしきりに髪をいじっている。長いポニーテールの一部を指先で絡めてはほどくを繰り返している。

「よし、ではこの私が教えてやろう。特別にな」

「うん。ありがとう篤お姉ちゃん」

「では、明日から必ず放課後は空けておくのだぞ。いいな？」

「はい！」

手を上げて返事をするいちか君。

「（放課後もいちかと一緒にいられる。それにISを機動させるから本来の一夏とも話せる。一度に二度楽しめる…ハッ！イカン、私は何を考えて…でも、久しぶりに会った一夏。かつこよくなっていたな…小さいいちかとかつこよくなつた一夏。イイ？）」

算の脳内では算を真中にいちか君と一夏とで握手をしてお花畑をスキップしていた。どうやら逝っちゃたようだ。あく涎が出ている。そんな算を見ていちか君は…

「算お姉ちゃん怖い。どうしちゃたんだろう…」

算の逝っちゃっているモード？を理解できず何時もどつり怯えるいちか君だった。

サアアアアア…

シャワーノズルから熱めのお湯が噴き出す。水滴は肌に当たっては弾け、またボディラインをなぞるように流れいく。白人にしては珍しく均整の取れた体と、そこから生まれる流線美はちよつとしたセシリアの自慢だ。しゅつと伸びた脚は艶めかしくもスタイリッシュで、そこいらのアイドルには引けを取らないどころか勝っているくらいである。シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

「（今日の試合…）」

いつだって勝利への確信と向上への欲求を抱き続けていたセシリアにとって、この困惑はひどく落ち着かないものだった。

「（ワザと負けた相手なのに…）」

腑に落ちない。なんだかすつきりしない。

「（織斑、一夏…）」

あの男子の事を思い出す。あの、強い意志の宿った瞳を。他者に媚びる事のない眼差し。それは、不意にセシリアの父親を逆連想させた。

「（父は、母の顔色ばかりうかがう人だった…）」

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていた。幼少の頃からそんな父親を見て『将来は情けない男とは結婚しない』という思いを幼いながらに抱かずにはいらなかった。母は強い人だったけれど憧れた人だった。でも両親はもういない。三年前事故で他界した。いつも別々で過ごしていた両親が、どうしてその日に限って一緒にいたのかは未だにわからない。そして手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者から守るためあらゆる勉強をした。その一環で受けたIS適正テストでA+が出た。そのままブルー・ティアーズの第一次運用試験者に選抜され、データ収集と戦闘経験値を得るため日本に来た。

そして出会ってしまった。織斑一夏と。理想の、強い瞳をした男と。

「織斑、一夏…」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。どうしようもなくドキドキする。

「……………」

熱いのに甘く、切ないのに嬉しい。なんだろうこの気持ちは。意識

すると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

知りたい…その向こう側にあるものを。

知りたい。一夏の、ことを。

そしていちか君…

最初は何とも思わなかったが今は…母性本能を擽るといっか、あの軟肌に触れてみたいといっか。

「（私色に染めてみたいですわね…）」

ジュルリ…という音が聞こえそうな感じがする。頬は緩み目は…逝っているようだ。

「（明日からが楽しみですわね…）」

キラーン！とセシリアの目が光った。

ゾク！いちか君は身震いをした。

「どうした、いちか？」

いちか君の様子が変なので心配する筈。

「わからないけど、凄く怖い感じがした…」

「？」

ニュータイプに覚醒しつつある、いちか君だった。

だいごわめ〜（後書き）

次回は鈴音を登場させます。いちか君とどう絡ませるか…  
とりあえず逝っちゃうとは思いますが。  
では〜

だいろくわめ〜(前書き)

やっと鈴の登場です。鈴も逝っちゃう予定です。ではよろしくお願  
いします！



だいろくわめ〜

翌日、朝のSHR。あり得ないことが起きていた。

「一年一組の代表は織斑いちか君に決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

真耶は嬉々として喋っている。そしてクラスの女子も大いに盛り上がっている。

「先生、質問です」

「はい、織斑君」

「僕は昨日の試合に負けたけど、なんでクラス代表になってるの?」

「それは…」

「それはわたくしが辞退したからですわ!」

がたんと立ち上がり、早速腰に手を当てるポーズ。

「まあ、勝負事態は納得がいきませんでした。が、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして」

事実、子供に怒っていたセシリア。

「いちか君。にクラス代表を譲ることにしましたわ。やはりIS操縦には実戦が糧。クラス代表となれば戦いには事欠きませんもの」

「いやあ、セシリアもわかってるね！」

「そうだよー。せつかく世界で唯一の男子がいるんだから、同じクラスになった以上持ち上げないとね！」

「私達は貴重な経験が積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいね、いちか君は」

「色々な衣装を着たいちか君を撮影させてくれれば、そしてその写真を売れば…確実に売れる！」

クラスメイトを売る女子達。

「そ、それですわね」

コホンと咳払いをして、あごに手を当てるセシリア。

「わたくしのように優秀かつエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げれば、それはみるみるうちに成長を遂げて…」

バン！机を叩く音が響く。立ち上がったのは箒だった。

「あいにくだが、いちかの教官は足りている。私が、直接頼まれたからな」

『私が』を特別強調した箒は、異様に殺気立っている瞳でセシリアを睨む。しかし、先週は怯んだセシリアも、今日は違った。正面から受け止めて、視線を返している。それどころかちよっと誇らしげだ。

「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん。Aのわたくしに何かご用かしら（やはり、障害になるのは彼女ですわね）」

「ら、ランクは関係ない！頼まれたのは私だ。い、いちかがどうし

てもと懇願するからだ（折角、いちかと二人きりなる機会が増えたのに邪魔をされてたまるものか！）」

「え、箒お姉ちゃんってランクCなの？」

「だからランクは関係ないと言っている！」

ちなみにいちか君はBらしい。

「座れ、馬鹿ども！」

すたすたと歩いて行ってセシリアと箒の頭を出席簿で叩く千冬。さすがは第一回世界大会の覇者、凄味が違う。

「お前達のランクなどゴミだ。私からしたらどれも平等にひよっこだ。まだ殻も破れていない段階で優劣をつけようとするな（本当は私が手取り足とり教えたいのに…）」

何を教える気でしょうか？千冬さんは…

「クラス代表は織斑いちか。異存はないな」

はいとクラス全員一丸となって返事をした。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコット。試しに飛んでみせる」

四月も下旬、遅咲きの桜の花びらがちようど全部なくなった頃。いちか君は今日もこうして千冬の授業を真面目に受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

そう言われていちか君は。いちか。と書かれた名札に指先だけ触れて、ISが展開されるイメージをする、

「(来て、白式)」

そう心の中でつぶやく。刹那、胸元の名札から全身に薄い膜が広がっていくのがわかる。約0.7秒ほどの展開時間。いちか君の体から光の粒子が解放されるように溢れて、そして再集結するようにまとまり、IS本体として形成される。それと同時にいちか君から一夏に姿も変わった。

「きゃ〜織斑君よ!」

「可愛いのもいいけどかっこいいのも…」

「誰かデジカメか何か持ってない！」

「馬鹿ども静かにしろ！織斑、オルコット。二人とも飛べ（やはりこちらの一夏もイイ！）」

そう言われてセシリアの行動は速く、一気に急上昇して遙か頭上で静止する。

「どうした？お前も行け」

「あ、ああ」

一夏は空を見上げ…消えた。

「えっ…」

「お、織斑君が消えた…」

「ど、何処に行ったの…」

急に一夏の姿が消えたので驚く女子達。

「まずまずだな…」

千冬は空を見上げてそう言った。

「えっ…」

女子達は空を見上げるとセシリアの隣に一夏はいた。

「何時の間に…」

あまりの一夏の速さに一同驚いていた。

「さすがですわね。一夏さん」

楽しそうにほほ笑むセシリア。その表情は嫌味でも皮肉でもなく、本当に楽しいという笑顔だ。あの試合以降、何かといちか君と一夏

のコーチを買って出てくる。一夏も（どういった心境の変化だろうか？友達として認めてくれたからか？）などと思っている。一夏のIS操縦の技術は相当なものだが知識も浅く経験も少ないのでセシリアの指導はありがたかった。

「一夏さん。よろしければまた放課後に指導してさしあげますわ。その時は二人きりで…」

「一夏！いつまでそんなところにいる。早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響く。見ると、遠くの地上では真耶がインカムを筈に奪われておたおたしていた。

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せる。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

言って、すぐさまセシリアは地上に向かう。

「うまいもんだなあ」



どつやら完全停止を難なくクリア したらしい。

「よし、俺も行くか…」

一夏は意識を集中させ、背中の翼状の突起からロケットファイヤーが噴出しているイメージをして、一気に地へ。そして…

一夏は砂埃が舞うことなく地上に降り立っていた。

「やっぱり消えたよね…」

「瞬間移動かな？」

「さすがにそれは…」

「ああ、あれはですねあまりの速さにみなさんが視認出来ないだけで…」

真耶が女子達に一夏の消える理由を話している。

「（別に特別な事をしてるつもりはないけどな…自然にできるん

だよな」

と考えていると千冬が一夏の前に立った。

「織斑、武装を展開しろ」

「はい」

一夏は右腕を突きだし、その腕を左手で握る。

。物体を斬る、刃のイメージ。鋭く、堅固な物体。強い、武器…。

「（来い…！）」

集中力が極限に達した時、手のひらから光が放出される。そしてそれが像を結び、形として成立する。光が完全に収まった頃には、一夏の手には《雪片式型》が握られていた。

「まだ遅いな。0.5秒で出せるようになれ（甘やかしたいが、厳しくせねば…）」

「はい」

「次、セシリア。武装を展開しろ」

「はい」

左手を肩の高さまで上げ、真横に腕を突きだす。一瞬で狙撃銃が握られていた。

「さすがだな、代表候補生。ただし、そのポーズはやめる。横に向かつて銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ（もし、一夏に当たったりしたら…）」

「で、ですが…」

「直せ。いいな」

「…はい」

「次は近接用の武装を展開しろ」

「えっ、は、はい」

銃器を光の粒子に変換、そして新たに近接用の武器を展開する。しかし光はなかなか像を結ばず、くるくると空中をさまよう。

「くっ…」

「まだか？」

「す、すぐです。ああ、もっつ！《インターセプター》！」

武器の名前を半ばヤケクソ気味に叫ぶ。それによりイメージはまつまり、光は武器として構成される。

「…何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもらおうのか？」

「じ、実戦では近接の間合いに入ら…」

「織斑との対戦で初心者に簡単に懐を許していたように見えたが？」

「あ、あれは、その、予想外というか…」

「ごにょごにょとまごついて、セシリアの言葉は歯切れが悪い。セシリアはキツと一夏を睨むと…」

「どうしたのセシリアお姉ちゃん？」

いつの間にかISを解除して一夏からいちか君になっていた。

「ず、ズルイですわ！」

何がズルイのかいちか君には何も言えず我慢するセシリア。

「時間だな。今日の授業はここまでだ（うまくかわす事を覚えたな、一夏）」

こんな感じで今日の授業が終わった。

「ふっん、ここがそうなんだ…」

夜。IS学園の正面ゲート前に、小柄な体に不釣り合いなポストン

バックを持った少女が立っていた。

「えーと受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから切れの紙を取り出す。くしゃくしゃになったそれは、少女の大雑把な性格と活発さを非常によく表していた。

「本校一階総合事務受付…って、だからそれどこにあんのよ」

文句を言っても、紙は返事をしない。少女は多少のイライラと一緒に紙を上着のポケットにねじ込む。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

ぶつくさ言いながらも、その足はとにかく動いている。思考よりも行動。そういう少女なのだ。良く言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えてない』である。

「( ) ったく、出迎えないとは聞いていたけど、ちよつと不親切すぎるんじゃない？政府の連中にしたって、異国に十五歳を放り込むとか、なんか思うところないわけ？」

少女は、日本人に似ているがよく見ると違う。その鋭角的でありながらもどこか艶やかさを感じさせる瞳は、中国人のそれだった。

「誰かいないかな。生徒とか、先生とか、案内できそうな人」

学園内の敷地をわからないなりに歩きながら、きよろきよろと人影を探す。とはいえ時間は八時過ぎ、どの校舎も灯りが落ちていている。当然生徒は寮にいる時間だった。

「（空でも飛んで探したいけど、手続きも終わってないのにISを機動させたら外交問題にも発展するかもしれないし。そういう事だけはやめてくれって政府高官が情けない顔して言ってたしね）」

ふっふーんと少女は笑った。

「（自分の倍以上も歳のある大人がへこへここと頭を下げるのは、ちよつと気分がいいな。昔から『歳をとっているだけで偉そうにしている大人』が嫌いだったからね。今の世の中は居心地がいいわね）」

男の腕力は見戯、女のISこそ正義。今の世の流れはそうなっている。

「『男っていうだけで偉そうにしている子供』って大嫌いだったな」

物想いに耽る少女。

「（でもアイツは違ったなあ。私が日本に帰ってくる最大の理由になっっている思いで…元氣かな、アイツ。まあ、元氣だろうけど。元氣でない姿を見た事がなかったかな」

「なん…だ…だっ…」

ふと、声が聞こえる。視線をやると、女子がIS訓練施設から出てくるようだった。どの国でもIS関係の施設は似たような形をしているから、すぐにそうだとわかる。

「（ちよつどいいや。場所聞こつと）」

声をかけようとして、少女は小走りにアリーナ・ゲートへと向かう。

「うまく出来ていたかな？ 篝お姉ちゃん」

「（えっ、何で子供がここにいるの？）」



少女は声が聞こえた所に行くと一人の少女と小さな子供が一緒に歩いていた。

「ああ、いちか。イメージを掴むのが上手くなったな。私も教えがいがある」

箒はそう言っていていちか君の頭を撫でた。

「へへ…」

嬉しそうに微笑むいちか君。

「……………」

二人は話しながら何処かへ行ってしまった。状況がわからず唖然としてしまい声をかける機会を無くした少女だった。それからすぐに総合事務受付は見つかった。アリーナの後ろにあるのが、本校舎だったからだ。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

愛想のいい事務員の言葉もどこか遠くにあって意識に届かない。

「（あの子、何処かで見た事がある気がする…何処だったかな？それに一夏って言ってたような…）」

いちか君のことが気になってしかたがない様子。

「織斑一夏って、何組ですか？（まっ、気にしても仕方がないか。それより…）」

「ああ、噂の子？一組よ。凰さんは二組だから、お隣さんね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

「二組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと…聞いてどじりするの？」

鈴音の態度にすこしおかしなところを感じたのか、事務員はすこし戸惑ったように聞き返す。

「お願いしようかと思って。代表、あたしに譲ってって……」

にっこりした笑顔でいう鈴音だった。

「というわけでっ！いちか君クラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう！」

パン、パンパン。クラッカーが乱射される。今は夕食後の自由時間。場所は寮の食堂、一組のメンバーは全員揃っていた。各自飲み物を手にやいのやいのと盛り上がっている。壁には『織斑いちか君クラス代表就任パーティー』と書いた紙がかけてある。

「いや〜これでクラス対抗戦も盛り上がるねえ」

「ほんとほんと」

「ラッキーだったよね〜。同じクラスになれて」

さつきから相づちを打っている女子は二組のような気がする。明らかに三十名以上いると思われる。

「人気者だな、いちか」

「そうなの？ 箒お姉ちゃん」

「ふん」

箒は鼻を鳴らしてお茶を飲む。

「はいはい、新聞部です。話題の新生、織斑いちか君に特別インタビューをしに来ました」

オーと一同盛り上がる。

「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

「ではではずばり織斑いちか君。クラス代表になった感想をどうぞ

「！」

ボイスレコーダーをずっといちか君に向けて無邪気な子供のよ  
うに瞳を輝かせている。

「え、えっと…」

返答に困るいちか君。

「み、みんなの期待に応えられるようにがんばります」

「え、もっといいコメントちょうだいよ、僕の魅力で学園の女子全  
員にフラグを立てますとか」

「？」

「小さいいちか君には無理かな。適当にねつ造しておくか」

関係ないコメントとねつ造してそれでいいのか？新聞部。

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「わたくし、こういったコメントはあまり好きではありませんが、仕方がないですわね」

とかなんとか言いつつ満更でもないセシリア。

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したか  
というと、それはつまり…」

「ああ、長そつだからいや。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい」

「いいよ、適当にねつ造しておくから。よし、織斑いちか君いや織  
斑一夏君に惚れたからってことにしよう」

「なつ、な、ななつ…?」

ポツと赤くなるセシリア。

「セシリアお姉ちゃんどうしたの?」

首を傾げてセシリアに質問するいちか君。

「な、何でもありませんわ」

「はいはい、とりあえず二人並んでね。写真を撮るから」

「えっ？」

意外そうなセシリアの声。しかし喜色を含んで弾んでいるようにも聞こえる。

「注目の専用機持ちだからね。ツーショットもらつよ。握手でも…  
うーんいちか君が小さいからバランスが悪いな」

顎に手を当てて考える黛さん。

「そうだ！セシリアちゃん。いちか君を膝の上に座らせてあげて。  
そのツーショットを撮るから」

「え？ひ、膝のう、上ですか？」

「そ。膝の上」

「し、仕方ありませんわね」

赤くなりながら、でも嬉しそうにいちか君を自分の膝の上に座らせるセシリア。

「あ、あの撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて…」

「時間がかかるからダメ。はい、撮るよ」

「はい」

「元気に返事をするいちか君。セシリアは何か顔が緩んでいる。」



「（ああ…いちか君がわたくしの膝の上に。可愛い小動物を彷彿させるような感じ。ああ…）」

セシリアも箒と同様に逝っちゃう傾向があるようだ。

「せ、セシリアちゃん…ちょっと顔が怖いんだけど…」

「はっ！すみません…（わたくしとしたことが…）」

普通のスマイル？になるセシリア。

「今度こそ撮るよ〜」

パシャッとデジカメのシャッターが切られる。

「な、なんで全員入っているんですの!」

恐るべき行動力をもって、一組のメンバーが撮影の瞬間にいちか君とセシリアの周りに集結していた。

「あ、あなたたちねえ!」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「私は一夏君と撮りたい…」

口々にセシリアを丸め込むようなことを言っている。

「う、ぐ…」

苦虫かみつぶしたような顔をしているセシリアを、クラスメイトはにやにやとした顔で眺めていた。そしてパーティーは十時過ぎまで続いた。

「さあ、いちか君。今日はわたくしと一緒に寝ましようか」

いちか君の手を取って食堂から出ようとするセシリア。

「待て！」

それを引きとめる箒。

「いちかは私と同じ部屋で寝るんだ。何故お前と一緒に寝なければならぬ！」

「わたくしはただ添い寝をしてさしあげようと思ひまして」

「そんな事は必要はない！（それは私だけの特権だ！）」

箒とセシリアが言い合ひをしていると…

「箒お姉ちゃん、セシリアお姉ちゃん。二人ともケンカしてるの？」

涙目で聞いてくるいちか君。二人に落雷が落ちた。

「そ、そんな事はないぞ。なあ、オルコット（か、可愛い！）」

「え、ええ。そうですね。ねえ篠ノ之さん（や、やはりお持ち帰

りしたいですわ！」

二人ともどこかの国のお偉いさんが条約などを結んだ時に、撮られる握手の状態になる。しかし二人とも顔は逝っていた…

「そうなんだ〜（何だろう。怖い人が二人になっちゃたよ…）」

笑顔になるいちか君。でも心では怯えているようだ。

「（ほっ…）」

いちか君が笑顔になり安心する二人。結局セシリアと寝るといことはうやむやになりいちか君は自分の部屋で寝た。

「いちか君。おはよー。ねえ、転校生の噂聞いた？」

朝、いちか君が席に着くなりクラスメイトが話しかけてきた。

「転校生ですか？知らないです」

今はまだ四月。入学ではなく転入というのは変だろう。

「何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「そうなんですか」

代表候補生といえば…

「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

とセシリア。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？騒ぐほど事でもあるまい」

と篤。

「どんな人なんだろう？」

「む…気になるのか？」

「うん。篝お姉ちゃん」

「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

「そうですね。いちか君。クラス対抗戦に向けて、より実践的な訓練をしましょう。専用機を持っている私達だけで」

『だけ』を強調するセシリア。

「と、とにかくがんばります！」

「がんばるだけでは困りますわ。いちか君、一夏さんには勝っていただきますと！」

「そつだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「いちか君が勝つとクラスみんなが幸せだよ！」

セシリア、篝、クラスメイトと口々に応援？をしてくれる。そんな話をしているとあつという間にいちか君の周りは女子で埋め尽くされた。

「いちか君、がんばってね！」

「フリーパスのためにもね！」

「出来れば戦闘時間は長めにね。撮って販売するから」

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

と話しているところ...

「その情報、古いよ」

教室の入り口からふと声が聞こえた。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝はできないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは...

「鈴…鈴お姉ちゃん！」

「そうよ。中国だい…ってあんたは？」

「鈴お姉ちゃん」

そう言っつて鈴音の脚に抱きつくいちか君。

「え、ええと…」

戸惑う鈴。

「え、えつとあんたは誰？」

「え…」

急に涙目になるいちか君。

「鈴お姉ちゃん。僕の事忘れちゃったの…」



凄まじい落雷が鈴に落ちたような気がする。あ…ちよっと顔が緩んでいる。

「（な、何、この可愛い生きものは？…ってこの子あの時見た子よね。そう、どこかで見た覚えが…そ、そうよ！一夏に似ているのよ）」

「鈴お姉ちゃん…」

「あ、あんた。な、名前は？」

「え…僕は織斑い…」

鈴音が急に真っ白になった。某ボクサーのよう一瞬で真っ白になるまで燃え尽きたようだ。

「（まさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさかまさか…い、一夏の子供じゃ…）」

今度はふるえだす鈴。

「鈴お姉ちゃん、大丈夫？」

鈴の異変を心配するいちか君。

「あなた、一夏の子供じゃ…」

「そうだ」

鈴の後ろから声が聞こえた。

「ち、千冬さん！」

「織斑先生と呼べ。それからその子は私と一夏との間に生まれた…」

「だから僕は織斑いちかだよ。鈴お姉ちゃん」

千冬が何か言いきる前にいちか君が自分の名前を言った。

「え？」

いちか君と千冬を交互に見る鈴。

「に、人間は時には冗談の一つも言えんな…」

誤魔化そうとする千冬。

「真顔で言ってますでした？」

質問する鈴。

「うるさい」

出席簿で鈴の頭を叩く千冬。

「詳しい事は後で話してやるから教室に戻れ」

「わかりました…」

千冬には勝てない鈴。

「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「うん！またあとでね。鈴お姉ちゃん」

笑顔で手を振るいちか君。

「うっ！（可愛い。何？あの可愛さは？）」

「さっさと戻れ（私のいちかに、やはり手を…手を出す気が…）」

「は、はいっ！」

顔を緩ませながら出て行く鈴だった。

「い、いちか！先っきのは…」

「い、いちか君。今のは…」

箒やセシリア、クラスメイトが質問しようとしたが千冬が出席簿でそれぞれの頭を叩きさせなかった。そして今日も一日EISの訓練と学習が始まる。



だいろくわめ〜(後書き)

次回は鈴音との約束ですが、ちょっと変化させるつもりです。五反田も少しだけ登場させようと思ってます。おもしろくなるようにがんばりますので次回もよろしくお願いします！

## だいななわめ〜(前書き)

鈴の約束を変化させると前回言いましたが、内容は約束が出来なかったという設定で行きます。何故出来なかったかは、本文を読んでもらっていただければ。では今回もよろしく願いします！

## だいななわめ

私、鳳鈴音は授業を受けながら考えていた。淡い恋心を抱いて久しぶりに会った幼馴染は…子供になっていた。千冬さんに話を聞いた時にはにはわかには信じられなかったけど、目の前に小さくなっている一夏がいる以上信じるしかない。原因はまだわかってないようだけれど。何と言うか拍子抜けだった。一夏に会って、その…色々…話とか…とか…と、とにかく色々あったから！まあISを起動させれば本来の一夏に会えるのだから問題がないと言えはばない。それに小さい一夏を見ていると…何だろっ顔は緩んでくる。

「鳳さん、な、何か顔が緩んでいるというかニヤけてない？」

「黄昏れていると思えば顔が緩んだり、あっ涎が出てる」

「し、心配だよね…」

クラスメイトが何か言っているけど気にしない。今、私は大切な事を考えているから。一夏にどうやって、ここに、く…はっ…く…理由だ。本当はもっと前にするつもりだったのに邪魔をする奴がいる。そいつは五反田弾だ。一夏とは中学の頃からの友達だけど私にとっては不倶戴天の天敵だ。アイツは私が一夏と二人きりになるうとするのをとことん邪魔をしてきた。それ以外の事も。何故かと思えばアイツは…アイツは…、BL系…だった…。どうやら弾は一夏





その後、一夏を問い詰めると親しい友達を集めて弾の家に泊まった  
そうだ。あの時は本気で安心した。仮に一夏が、その…何と云うか  
…道を踏み外しても、わ、わ、私のお、女としての、み、魅力で、  
その…戻してあげるといっか…。自分の頬がカアアアと赤くなる  
のがわかる。そしてその後も弾はやたらと一夏の事をあきらめさせ  
ようとしてくる。一夏は自分のものだと言いながら。更には私が一  
夏にしようとした。約束。の邪魔までしてきた。あー思いだしたら  
腹が立ってきた！

「鳳さん。悩んでいるように見えたら、急に赤くなって、次は怒り  
だしたけど…」

「あつ、ペンを握り潰した」

「心配だよね…」

クラスメイトがまた何か言っているけど気にしない。私は大切な事  
を考えているから。とにかく弾は私の中で要注意人物になっている。  
ただ要注意人物は弾だけじゃない。初めてIS学園に来た時、小さ  
い一夏と歩いていたポニーテールの女子だ。小さい一夏が懐いてい  
たようだった。本来の一夏が彼女の事をどう思っているかはわから  
ないけど小さい一夏が懐いている以上、彼女には油断は出来ない。  
小さい一夏の気持ちが本来の一夏にどんなふうに影響をあたえるか  
わからないから。それに小さくなったとはいえ一夏とあんな風にし  
ていると彼女に一夏を盗られたようで私の気分はよくない。そして  
彼女は自分と同じ想いを抱いていると思う。一夏の事が好き。と

いう想いを…。同じ想いを抱いているからこそわかる。だから彼女も要注意人物だ！弾以上に。まずは本来の一夏と会わないといけないわね。食堂で待ち伏せをしておけばいいかな。来るのは小さい一夏だろうけど、その時に何時ISを起動させて本来の一夏に戻るか聞かないと。改めて思う。小さい一夏って何と言うか…可愛いよね。お持ち帰りしたくなるくらいに。あゝ早く昼休みにならないかしら？そうしたら小さい一夏を…

「じゃは…」

「鳳さん…今度は真剣な顔したと思ったら、また顔が緩んでいるわね」

「ちょっと、いや、かなりかな？怖くなってきたよ…」

「さつきより、涎の量が多くないかな？」

クラスメイトがまたまた何か言っているけど私は気にしない。今は小さい一夏とのスキンシップについて色々と考えているから。待つててね、一夏…

「ひぐ？」

授業中、いちか君が急にビク！と驚き頻りに周りを気にしている。

「ど、どうしたの？織斑君？」

「何か怖い感じがしたんだ…」

「？」

いちか君がまだ気にしていると、真耶がいちか君を抱っこした。

「大丈夫です。何も怖い事なんてないですよ。誰も織斑君を怖がらせたり狙ったりなんてしません。そんな事をする人がいたら、先生が怒っちゃいます」

笑顔でいちか君を慰める真耶。

「うん！」

真耶のお蔭で笑顔になるいちか君。そんな二人のやり取りを見て…

「（う、うらやましい。いちかを慰めるのは私がしたかった…）」

「（ああ…怯えるいちか君、笑顔のいちか君。どっちも素敵ですわ…でも、いちか君を慰めるのはわたくしが…）」

篝とセシリアは心の中でこう思っていた。そして…

「……………」（山田先生、うらやましい…それにしてもいちか君を狙うって、それ私の事？）「……………」

一組一同、同じ事を思うのだった。いちか君はこの学園にいる方が危険なのでは？そして別の教室では…

「誰かに呼ばれた気が…」

千冬が周りを気にしている。いちか君を狙うで反応したようだ。これで良いのかこの学園は？

だいななわめ〜(後書き)

自分なりに弾にもっと個性を持たせたかったのでB L系にしてみました。弾のフアンの方々、すいません。次回は箒と鈴のいちか君との同室についての会話。一夏と鈴との会話。セシリアが一人で妄想の世界へ…を考えてます。次回もよろしくお願いします。

## だいはちわめ〜(前書き)

セシリアの妄想シーンを入れるつもりが都合により入れませんでした。次回はバトルが多くなりそうでギャグが少なくなりそうなのでここに訪れた方々が楽しんでくれたら幸いです。では、よろしくお願ひします。

だいはちわめ〜

鈴が一夏の事で色々と考えている時、一組のこの二人はこういった事を考えていた。

「(さっきの女子は何なのだ…いちかが懐いていたが…)」

朝の一件が気になって、篤はなかなか授業に集中できないでいた。

「(いちかの反応は、久しぶりに私に再会した時と同じような…そう、幼なじみと再会したような…)」

ムカツ!

「(幼なじみは私だろう…何より私以外にあんな風に懐くなんて…そこはセシリアと山田先生も同じなのだが…)」

篤はちらりといちか君の方をうかがう。いちか君はがんばってノートを取っていた。

「(少しくらい、私を気にしたらどうなんだ!)」



「ご立腹の筈。」

「（しかし、まあ、冷静に考えてみればたいしたことはない。何せ、私はいちかと同じ部屋。昨日の夜もそうだったように、ふたりきりの時間はいつでも作れる）」

急に余裕の笑みを浮かべる筈。

「（そう、私のアドバンテージは揺るがない。それはさっきの女子にしてもそうだし、セシリアにしてもクラスメイトにしてもそうだ。いちかに（自主規制）や（自主規制）などできるのは私だけだ。そう、いちかとの幸せな時間は私だけのものだな。そして一夏との時間も…今日の放課後はまた特訓だな）」

うんうんとひとり頷く筈。その表情はどこか楽しげで…少し涎を垂らしていた。

「篠ノ之、答えは？」

「は、はいっ？」

突然千冬に名前を呼ばれて、筈は素っ頓狂な声を上げる。

「答えは？（いちかの事を考えていたな…）」

「…き、聞いていませんでした…」

バシーン！と小気味のいい打撃音が響いた。

「……………」

教室の後ろの方では、セシリアがノートにシャーペンを走らせていた。しかし、書かれているのはおよそ意味のない線で、言葉にすらなっていない。

「（なんなんですよ、さっきの方は！）」

いちか君がいやに懐いた女子が気になってしょうがない様子。

「（ただでさえ、現時点で篠ノ之さんという最大のライバルがいるのに、これ以上競争相手が増えたら気が気ではありませんわ）」

それに一夏との人間関係においては鈴の方がリードしている。

「（他の事ならともかく、男性の取り合いとなると思いどおりにはいきませんわ。しかも代表候補生…一年では四人しかおらず、専用機持ちは一夏さんを抜けば二人。かなり大きなリードポイントのはずだったのに…」

なんとか、箒や鈴を大きく突き放すイニシアチブを取らなければならぬ。

「（ISの模擬戦だけでは足りませんわ。もつとなにか、こう決定打になるような…やはりここは、既成事実を作るしかありませんわ！いちか君に対しても、一夏さんに対しても。ふふふ…」

「オルコット」

「それにいちか君に（自主規制）するのは…」

「……………（いちかに）（自主規制）するだど！」

箒の時よりも激しい音が教室に響いた。

「お前のせいだ！」

「あなたのせいですわ!」

この後も山田先生と千冬に何度も注意され、そして叩かれたため、二人はいちか君に文句を言うつもりだったが

「痛い痛い飛んでけ」

と言って二人の頭を撫でると

「(なっ…い、いちかがわ、私になでなでを…)」

「(一夏さんに可愛がられるのも良さそうですけど、いちか君に可愛がられるのも…)」

そして二人は昇天した。そんな感じで昼休み、いちか君は箸とセシリアと手を繋ぎ、数名のクラスメイトと食堂に行く事にした。三人はそれぞれ食券を買った。箸はきつねうどん、セシリアは洋食ランチ、いちか君はお子様ランチだ。チキンライスにミニハンバーグにエビフライ、唐揚げにミートソーススパゲティ、デザートにプリンといった王道的なメニューだ。食券を出そうと進むと…

「待ってたわよ、いちか！」

どーん、といちか君の前に立ちふさがったのは噂の転入生、凰鈴音だった。略して鈴だ。髪型はツインテールの少女。ちなみにその手にはお盆を持っていて、ラーメンが鎮座している。

「あっ！鈴お姉ちゃん〜」

鈴の脚にくっつき甘えるいちか君。

「ちょ、ちょっと、い、いちか…（あ…や、やっぴり。可愛い…）」

「？」

「と、とりあえず食券を出しにいくわよ」と、とりあえず落ち着かないと…」

「うん！」

今度は鈴と手を繋ぐいちか君。そんな二人を見て…

「（このどろぼう猫！）」

「（ず、ズルイですわ！）」

などと思いながら鈴を睨んでいた。そして注文の品を貰い席について食べ始める一同。

「そ、それにしても久しぶりね。アンタ、元気にしてた？」

「ん？」

スパゲティを口一杯に頬張りながら鈴を見るいちか君。

「あゝ口のまわりにミートソースがついてるわよ」

「んっ…」

そう言いながらいちか君の口を拭いてあげる鈴。

「世話がやけるわね」

そう言いながら満更でもない様子。

「ありがとう。鈴お姉ちゃん」

そう言っただけはチキンライスを食べるいちか君。

「今度は頬にご飯粒がついてるわよ」

鈴はいちか君の頬についた米粒を取ってあげそして…

パク…食べた。

バキ？

何かが壊れるような音がした。

「むっ？箸が折れてしまった（私がやろうとした事を！）」

「あら？フォークが…（これ以上の暴挙は許しませんわ！）」





らの幼なじみの話をしていたのを思い出したけど、確かこんな名前だったよな…」

「そうだが…」

「ふうん、そうなんだ…（私の感は間違いじゃないわね…）」

鈴はじろじろと箸を見る。箸は箸で負けじと鈴を見返していた。

「初めまして、私は凰鈴音。これからよろしくね。一夏から貴方の事は聞いているわ」

「ああ。こちらこそ（むっ…この感じは…）」

「」（コイツは一夏をめぐるライバル！）」

そう思いながら挨拶を交わすふたりの背景には龍と虎が睨みあっている姿が見えるような気がする。

「えっと、いちかが言っていた二番目のお姉ちゃんって言うのは多分、私が二番目の幼なじみって事だと思っわ」

「二番目？」

「私と貴女。貴女が引越した後、私が来て一夏と一緒にいたから。貴方が一番目の幼なじみ。私が二番目の幼なじみって事だと思っわ」

「そうだよ」

いちか君が笑顔で言う。

「そ、そうか（私が一番か…）」

「ンンッ！わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコックトですよ。まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ…」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリア。

「い、い、言っておきますけど、わたくしあなたのような方には負けませんわ！（いちか君の事に関しても）」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん（このセシリアって子も…）」

ふふんといった調子の鈴。

「い、言ってくれますわね…」

箸は無言で箸を止める。セシリアはわなわなと震えながら拳を握りしめた。それに対して鈴は何食わぬ顔でラーメンをすすする。

「いちか」

「何、鈴お姉ちゃん？」

「アンタ、クラス代表なんだって？」

「うん、そうだよ」

「ふーん…あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど?」

顔はいちか君から逸らして、視線だけ向けている。

「ん?いいの…」

ダンツ!テーブルが叩かれた×2。一緒にメキツ!と壊れたような音もしたような…とにかく、箒とセシリアが叩いた勢いのまま立ち上がる。

「いちかに教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ! (邪魔者がこれ以上増えたら、いちかとの幸せの時間が…)」

「あなたは二組でしょう。敵の施しは受けませんわ (邪魔者が増えるだけは阻止ですわ)」

「あたしはいちかに言ってんの。関係のない人は引っ込んでよ」

「か、関係ならあるぞ。私がいちかにどうしても頼まれているのだ」

「一組の代表ですから、一組の人間が教えるのは当然ですわ。あなたこそ、後から出てきて何を図々しいことを」

「後からじゃないけどね。あたしの方が付き合いは長いんだし」

「そ、それを言うなら私の方が早いぞ！それに、いちか、じゃなく一夏は何度もうちで食事をしている間柄だ。付き合いはそれなりに深い」

「うちで食事？それならあたしもそうだけど？」

鈴の家は中華料理屋で安くて量も多く、しかもうまいものだから一夏はよく食べに行ったようだ。そして時間と機会を重ねるうちに次第に鈴の気持ちも…

「い、いちかつ！どっいことだ？聞いてないぞ私は！（家に行くなんてまさか！）」

「わたくしもですわ！いちか君、納得のいく説明を要求します！（彼女の方が（自主規制）の面でも一歩も二歩もリードしているというの？）」

「？」

いちか君は首を傾げて二人を見ている。

「鈴お姉ちゃんのおうちはね、中華お料理がたべられるお店なんだよ。とってもおいしいんだよ〜」

テーブルから身を乗り出しおいしさを伝えようと身振り手振りをするいちか君。

「な、何？店なのか？」

「あら、そうでしたの。お店なら別に不自然な事はありませんわね」

ほっ…とする二人。

「鈴お姉ちゃん。おじさんは元気にしているの？」

「あ…うん、元気にしている…かな」

急に鈴の表情に陰りがさした。

「そ、それよりさ、今日の放課後って時間ある？久しぶりにどこか行くところか？」

「あいにくだが、いちかは私とISの特訓をするんだ。放課後は埋まっている（絶対に二人きりになどさせん！）」

「そうですね。クラス対抗戦に向けて、特訓が必要ですよ。特にわたくしは専用機持ちですから？ええ、いちか君には欠かせない存在なのです（あなたのお好きにはさせませんわ！）」

さっきまでの劣勢はどこへやら、一転攻勢に転じたふたりはここぞとばかりにいちか君との特訓を持ちだす。

「じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、いちか」

ラーメンのスープを飲みほし、鈴は空いた皿を片づけそのまま食事を出て行った。

「いちか、当然特訓が優先だぞ」

「いちか君、わたしたちの有意義な時間も使っているという事実を

お忘れなく」

「……………」

難儀ないちか君だった。

「え？」

放課後の第三アリーナ。今日もセシリアにIS操縦を教わる予定だった一夏は予想外の展開に驚いていた。

「な、何だその顔は、おかしいか？」

「いや、その、おかしいっていつか……」

「篠ノ之さん！ど、どうしてここにいますの？」

一夏とセシリアの前にいるのは筈だった。しかもIS『打鉄』を着、展開している。打鉄は純国産ISとして定評のある第二世代の量産機。



「どうしてもなにも、一夏に頼まれたからだ」

「それに近接格闘戦の訓練がたりていないだろう。私の出番だな」

「くっ…まさかこんなにあっさり訓練機の使用許可が下りるなんて…」

「では一夏、はじめとしよう。刀を抜け」

「あ、ああ」

やる気満々の筈。一夏もそれに応え《雪片式型》を抜いた。

「では…参る！」

「お待ちなさい！一夏さんのお相手をするのはこのわたくし、セシリア・オルコットですよ！」

一夏の前に割って入るセシリア。

「ええい、邪魔な！ならば斬る」

「訓練機」ときに後れを取るほど、優しくはなくてよー！」

激突する二人。一夏はこの展開について行けずぼろとしていた。この後どちらの味方をするかと聞かれ、沈黙していると二対一の戦いをさせられる一夏だった。

「で、では、き、今日は…このあたりで、終わりに…しましょう」

「そ、そうだな…」

「ああ」

息が切れている二人に対してけろりとしている一夏。

「何をしている、早くピットに戻れ」

「あ、いや、箒。なんでこっち側に来るんだ？」

「私もピットに戻るからだ」

「いや、セシリアの方に…」

「ぴ、ピットなどどっちでも構わないだろう！（少しでも一夏とい  
たい…何て言える訳ない）」

一夏と箒はそのままピットに戻った。

「そういえば箒。剣道部に入るとか聞いたけど、毎日俺に付き合っ  
ていたら部活で他の女子に出遅れるぞ」

「そ、それはお前が気にする必要はない。…こっちの方で出遅れる  
方が大問題だ…」

「え、何？」

「な、何でもない！」

「あ、ああ…」

「一夏っ！」

パシュツとスライドドアが開いて鈴が現れる。

「え、えつと…ひ、久しぶり…い、一夏…」

もじもじとしながら一夏にあいあさつをする鈴。

「ああ、久しぶりだな鈴。元気そうだなにより」

「う、うん…」

「会った早々、小さい俺が迷惑かけてゴメンな」

「あ、う、うん。そんなの気にしないでいいわよ。幼なじみなんだし…」

「そっか。ありがとな」

笑顔で言う一夏。その笑顔を見て赤くなる鈴。

「一夏さあ、やっぱり私がいないと寂しかった？」

「まあ、遊び相手が減るのは大なり小なり寂しいだろう」

「そっじゃなくてさあ」

「まあ、何故か弾の奴はテンションが上がっていたけどな」

「……（あ、アイツ…何時か決着をつけてやるわ）」

拳をギュッと握る鈴。

「あ、あのね一夏、」

「あー、ゴホンゴホン！」

わざとらしい咳払いで鈴の言葉を遮ると、篝は『私は別に興味はなにのだが』というような態度で話し始めた。

「私は先に部屋に戻る。後で体を洗ってやる。では、また後でな。」  
一夏

『また後で』を強調する筈だった。

「…一夏、今のどづいづこと?」

先ほどのもじもじした時とは違い、不機嫌になる鈴。

「いや、俺ISを解除すると子供になるだろ?そんな俺じゃ体をしつかりと洗えないだろうからって筈が洗ってくるんだ。いくら水着を着ているからと言っても記憶が反映されるから止めてくれって言っているのに止めてくれないんだ」

「それはそれで問題だけど今は別!それより部屋に帰るのにまた後でって、どづいづ事?」

「俺、今筈と同じ部屋なんだよ」

「…は?」

「さっき言ったけどISを解除すると子供になるだろ、そんな俺を一人には出来ないから幼なじみの筈に面倒を任せようと学園側が決めな」

「……………」

「うん？どつした？」

「……………ったら、いいわけね……………」

「？」

うつむき加減の鈴が何と言ったのか聞きとれず耳を傾ける一夏。

「だから！幼なじみならいいわけね！」

「おお！」

「わかった。わかったわ。ええ、ええ、よくわかりましたとも」

一人で納得を始める鈴。

「幼なじみは二人いるってこと、覚えておきなさいよ」

「別に忘れてはいないが…」

「じゃあ、後でね!」

そう言っつて鈴はピットを出て行く。

「何なんだ…」

呆然とする一夏だった。

「というわけだから、部屋代わって」

「ふ、ふぎけるなっ!何故私ができるようなことをしなくてはならぬ  
い」

寮の部屋、夕食も終わりくつろぐムードのいちか君と篝の元に鈴が来た。

「いやあ、篠ノ之さんも男とそれも子供の面倒をみるなんて大変で  
しょ?気も遣うし、のんびりできないし。その辺、あたしは平気だ  
から代わってあげようかなって思っつてさ」



「べ、別にイヤとは言っていないし、いちかの面倒をみるのは苦ではない。部外者に首を突っ込んで欲しくはない!」

「大丈夫。あたしも幼なじみだから」

「だから、それが何の理由になるというのだ!」

こんな感じでさっきから全然話が進まない。

「とにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「ふ、ふざけるな!出て行け!ここは私の部屋だ!」

「『いちかの部屋』でもあるでしょ?じゃあ問題ないじゃん」

「それにお前にいちかの何がわかるというのだ!」

「わかる?わかってるわよ。あたしなんて(自主規制)や(自主規制)とか(自主規制)なんかしたしね」

「ふん。そんな程度か？私なんて（自主規制）や（自主規制）も（自主規制）など（自主規制）もしたぞ」

二人はガルルルルといいながら睨みあっている。

「いちかはどう思うっ？」

鈴がいちかに質問すると…

「すう…すう…」

寝ていた。

「（こゝ、これはー）」

箒はいちか君の寝顔を見て激震した。無邪気で、無垢な子供の寝顔。まるで天使のようだ。

「（はう…この寝顔は…反則だ。レッドカードがいくらあっても足りないぞ…）」

「（な、なんて罪作りな子なの、いちか…）」

二人は互いの顔を見ると一瞬のアイコンタクトで意見が一致し頷いた。『いちかの寝顔を堪能する』という事で意見が一致し、静かになった。そして部屋の事は後日決めることになった。

だいはちわめ〜（後書き）

今回はいちか君と一夏。箒とセシリアに鈴だけ登場しました。千冬がすこしだけ登場したか…もっと真耶達を出したいのに出せないとは、文才がないな…

次回はISのバトルです。一夏は勝てるかな？では！

だいきゅうわめく(前書き)

今年最後の更新です。これからも皆さんに読んでもらい、楽しんでもらえるようにがんばりますのでよろしく願います。では！

だいきゅつわめ〜

朝の学生寮の屋上、箒と鈴は屋上にいた。朝方まで『天使の寝顔のいちか君』を見ていたため、二人の目にはくまが出来ていた。

「部屋を代わる件だけど…」

「私は代わる気はない」

などと互いの意見は変わらず平行線を辿っていた。

「このままだと無駄に時間だけが過ぎちゃうだけだからこうしない？」

「？」

「クラス対抗戦で勝った組みの方が一夏と同じ部屋になるの」

「何？」

「初戦であたしと当たるかわからないけど一組、一夏が勝てば貴女

が一夏と同じ部屋に。あたし勝てば私が一夏と同じ部屋になるの。後、あたしと戦う前に一夏が負ければあたしが同じ部屋になるわね」

「お、お前が一夏と戦う前に負けた場合は…」

「あたしは負けないわよ。強いから」

何を言ってるの？と言わんばかりの様子の鈴。

「そ、そんな事…」

「貴女、一夏に特訓してあげてるんでしょ？一夏を信じてないの？」

「そんな事はない！」

「なら、そういう事で決まりね。この事は貴女から一夏に伝えてね。(ごめんね一夏。これはあたしとあんたとの、そう…『愛の試練』なのよ！もしあたしと戦う時は手加減してあげるから、この試練を一緒に乗り越えるわよ！)」

某映画の冒頭に出てくる波が岩を叩きつけるシーンが鈴の背景に見えた気がする。

「い、いいだろう。私と一夏、手と手を取り合って戦おう！」

「へ、へえ〜」

手と手を取り合っただけの部分に努筋を額に浮かべる鈴。

「さて、朝食を食べに行くかな」

フフン、と言いながら箸は学食に向かう。

「どうしてかしら？何か負けた気がするわ…」

一夏と同じ部屋になる切っ掛けを掴んだ鈴だが箸の一言で何処か負けた気がする鈴だった。

場所は変わって学食に向かう廊下。いちか君は白ウサギの着ぐるみを着て歩いていた。

「おはよ〜おりむ〜」



のほほんさん事、布仏本音の登場。

「おはよゝのほほんお姉ちゃん」

何と言うかリズムが何処か似ている二人。

「似合ってるよゝおりむゝどうしたの、その着ぐるみは」

「千冬お姉ちゃんが着てみなさいつて」

いいんですか？千冬さん。

「似合ってるよゝそういえば、おりむゝは一人なの」

「うん。朝、起きたら箒お姉ちゃんがいなくて。今、一人で学食に行ってるんだ」

「そっかゝじゃあゝ私も一緒に行くよ」

「うん！」

いちか君とのほほんさんが学食に向かっていると途中、セシリアに会った。

「あら、おはようございます。いちっ！」

セシリアはいちか君の姿を見て驚愕した。

「(な、なんて愛らしい姿なのでしょう！)」

一気に顔が赤くなるセシリア。

「(こ、これは…いちか君と一夏さんからのアプローチでは！そう…わたくしは白ウサギのいちか君を狙う狩人。でもそれはいちか君から一夏さんに変われば立場は変わる。一夏さんが狩人になってわたくしを…ああ、だ、ダメですわ。そ、そんな所…い、いけませんわ…一夏さああああああん)」

セシリアの妄想は止まる事を知らない。

「のほほんお姉ちゃん。セシリアお姉ちゃんが怖いよ……」

のほほんさんの手を両手で握り、怯えるいちか君。

「セシリアもお年頃だからね、仕方がないんだよ」

「お年頃？」

「そつだよ、しばらく帰ってこないだろうから先に行くよ」

「う、うん…」

セシリアを置いて学食に向かってしていると今度は箒と鈴にあった。

「（なっ、い、いちか。その姿は！）」

「（い、いちか。あんただれだけ反則をすれば気がすむの）」

白ウサギのいちか君を見て逝っちゃう二人だった。

「のほほんお姉ちゃん…箒お姉ちゃんと鈴お姉ちゃんが怖いよ……」

のほほんさんの後ろに隠れて怯えるいちか君。

「二人もお年頃だから仕方がないんだよ」

「お年頃って大変なんだね…」

「そうなんだよ」

「のほほんお姉ちゃんもお年頃なの？」

「三人ほどじゃないよ」

あはははと笑うのほほんさん。

「そうなの？」

「そうだよ」それより二人もしばらく帰ってこないだろうから先に  
行くよ」

「うん！」

いちか君とのほんさんは手を繋いで一緒に学食に向かった。二人が学食に入ると学食に激震が走った。白ウサギのいちか君の魅力にヤラれたようだ。その日、学食にいた生徒は全員、遅刻したそうだ。そして同じ日、生徒玄関前に大きく張り出された紙があった。表題は『クラス対抗戦日程表』。いちか君と一夏の相手は二組の鈴だった。

放課後は箒とセシリアとの特訓に勤しむ一夏。初戦から鈴が相手だと知り、気合の入る箒。特訓を仕切る箒に苦情を言うセシリアだったが箒の凄まじい気迫に押されてしまった。

「一夏。剣の道とはすなわち見という言葉がある。見とはすべての基本において…（一夏との相部屋は誰にも譲らない！そのためにも一夏にはもっと強くなってもらわなければ）」

「あ、ああ。（箒のやつ凄いい気迫だな。まるで自分が戦うみたいだ。俺もがんばらないとな…）」

「……………（わたくしとした事が、篠ノ之さんの気迫に呑まれるなんて…でも篠ノ之さんのこの気合の入りようは？）」

一方、鈴の方は…

「まさか、初戦で一夏と戦うことになるなんて…これは天からの一夏と相部屋になれとという啓示かな？」

それぞれの思惑がある？なか時間は過ぎて行き試合当日となった。

第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と鈴。噂の新入生同士との戦いとあって、アリーナは全席満員御礼状態だ。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。会場いりできなかった生徒や関係者は、リアルタイムで鑑賞するらしい。

一夏の視線の先には、鈴とIS『甲籠』が試合開始のときを静かに待っている。

「(きつと一夏もあたしと相部屋になりたいだろうけど、一夏もクラス代表としてワザと負けるわけにはいかないでしょうね。ここはあたし手加減して負かしてあげるしかないか)」

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスの指示にしたがい、一夏と鈴は空中で向かい合う。

「篠ノ之さんから聞いていると思うけど、この勝負…」

「夏と鈴は開放回線で言葉を交わす。」

「箒から？ いや…何も聞いてないぞ」

「え？」

「だから、箒からは何も聞いてないぞ」

錆びたロボットのよつにギギギギと首を動かし箒がいるであろう。ロボットの方を見る鈴。

リアルタイムモニターを見ながら汗を流す箒。

「（しまった…特訓のことで頭がいっぱいで、部屋替えの件のことを伝えるのを忘れていた…）」

一方、鈴は…

「（まさか何も伝えてないなんて。今から事情を話して…）」

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーと鳴り響くブザー。それが切れる瞬間に両者は動いた。

ガギインツ？

瞬時に展開した一夏の《雪片式型》と鈴が手にした異形の青龍刀《双天牙月》が互いの斬撃でぶつかり合い衝撃ではじき返される。

「ふうん。中々やるじゃない…（事情を話す前に始まっちゃった…一夏も本気できてるわね。もーこうなったら事情は後で話すしかないか！）」

「そりゃどうも！」

構える一夏。

「じゃあ、いくわよ！」

鈴が距離を詰めて攻撃をしかけてくる。《双天牙月》の刃は縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えながら斬り刻んでくる。しか



も高速回転していた。それを一夏はなんなくさばいていた。

「へえ」

一夏の剣さばきに素直に感心する鈴。

「なるほど。篠ノ之さんの特訓の成果はあるわけだ。なら…」

ぱかっとな鈴の肩のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光った瞬間、一夏は無意識に体を横に逸らした。

「なんだ？さっき…真横を見えない衝撃が走ったような」

「今のはジャブだからね（あれを避けるなんて…）」

また互いに距離を取るのだった。

「なんだあれは…」

リアルタイムモニターを見ていた幕がつぶやく。それに答えたのは同じくモニターを見ていたセシリアだった。

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲撃化して打ち出す」

セシリアの説明を箒は聞いてなかった。一夏に危険が及ぶたびに、箒の胸はずきりと痛んだ。

「一夏…」

箒は勝利よりもただただ一夏の無事を願っていた。

「うそ…」

鈴は一夏の實力に驚いていた。ここまで戦えるとは思ってなかった。衝撃砲をかわしながら一気に距離を詰めてきて斬撃をしてきた。一撃が速く防ぐだけで精一杯だった。それだけではない。速さでは一夏の方が速い。一瞬、姿が見えなくなる時がある。何て速さだろうか。

「これは、手加減なんて言っている場合じゃないわね」

自分の意識を変え本気でいく鈴。

「一夏！本気で行くわよ」

「ああ。俺も本気で行く……」

意思の籠った目で鈴を見つめる。そうすると鈴の顔が真っ赤になった。

「あ、う、うん……（か、カッコイイ……）」

一夏が『瞬時加速』で一気に行こうとした時……

ズドオオオオオンッ！！！！！！

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

だいきゅうわめく（後書き）

次回で一卷分が終わります。個人的にはシャルやラウラを早く出したいですから。次回はどうギャグを入れるべきか…  
ではみなさん。よいお年を！

ばんがいへん (前書き)

新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。今回は番外編です。勢いで書いたので矛盾しているところなど多々あると思いますが流してください。では

ばんがいへん

今となつては昔のこと。竹取の千冬という者がいた。野山に入って  
刀で竹を斬り様々なことに使っていた。

「何故、私がこんなことを…」

ぶつぶつと言いながら竹を取りに来た千冬。彼女が取っている竹の  
中で、根元が光る大きな竹が一本あった。不思議に思い近寄ってみ  
ると、竹の筒の中が光っていた。

「はっ！」

千冬は刀を抜刀し横に竹を斬ると着物を着た可愛らしい男の子が入  
っていた。

「じ、これは…」

急に息が荒くなる千冬。

「じ、この子は毎晩私の夢に出てくる男の子では…」

どんな夢を見ているのでしょうか？

「お姉ちゃんは誰？」

可愛らしい男の子は首を傾げながら聞いてきます。

「はあ、はあ。っわ、私は竹取の千冬。お前のお父さんだ」

お母さんではなくて？というか変質者に見えますよ千冬さん。

「さあ、家に帰るぞ」

「はっい」

竹取の千冬は可愛らしい男の子を騙し？一緒に家に攫って帰るのだった。（これは犯罪ですよね？）

家に連れ帰ると千冬の妻？である真耶が大変驚きました。

「お。織斑先生、じゃなくて…ち、千冬さん。どこのお子さんを攫

つてきたんですか！いくら可愛さに耐え難くなくても…」

スパアン！と大きな音が家に響いた。

「い、痛いです…」

涙目になる真耶。

「落ち着け。私がそんな事をするはずがないだろう。この子は竹の中で拾った」

いつの間にか手にしたハリセンを手にして言う千冬。

「ほ、本当ですか？」

疑惑の目で見る真耶。それはそうだろう。竹の中で拾ったっていわれてもね…

「ほう。私の言葉を疑うのか…」

「い、いえ。そんな事はありませんよ！」



すぐに疑惑を消す真耶。この家は亭主関白のようですね。

「とにかくこの子は家で育てる。いいな！」

「は、はい！」

ピシッ！と敬礼をする真耶。軍隊ですか？

「え、え〜と。あなたのお名前は何て言うのかな？」

真耶が可愛い男の子に質問する。

「いちかだよ」

笑顔で言ういちか。

「そっか。いちか君か…私はやま…じゃ、なくて、真耶といます。よろしくね」

「うん！」

いちか君の頭を撫でながら笑顔で自己紹介をする真耶。いちか君も気持ちよさそうだ。

「彼女は君のお母さんだ。そして私はお父さん。さあ、呼んでみる」

急にそんな事を言われて戸惑ういちか君。

「え、えっと…」

顔を赤くしてもじもじするいちか君。

「ち、ち、千冬お、お父さん…」

「ああ（恥ずかしがるいちか）…こ、これは…たまたまああああああああああああん！」

「ま、真耶お、お母さん…」

「はい」

お父さんの方は逝っちゃっているようですがお母さんの方はとても優しそうですね。

「さあ、ご飯ができているから食べましょうか」

「うん。ま、真耶お母さん…」

「ふふふ。お母さんって呼ばれると何だか照れちゃいますね。おり、じゃなくて千冬さんもお父さんと呼ばれて照れちゃいません?」

真耶が千冬に質問すると…

「（恥ずかしがるいちか…イイ!）」

顔がだらしなく緩み、涎をたらしていた。

「真耶お母さん。千冬お父さんが怖い…」

「だ、大丈夫ですよ。多分…」

怯えながら千冬お父さんを見る二人だった。

千冬がいちか君を攫って、ではなく拾って、ではなく保護：養子に迎えてからというもの、買った株価は上昇するは、適当に考えたご当地グルメは売れるは、千冬のファンが増えて貢物は増えるなど段々と千冬達は裕福になっていきました。

千冬達はいちか君を大切に大切に大切に大切に育てました。この子の可愛さには比類がなく、家の中には暗いところがなく光に満ちていた。千冬も気分が悪いときでも、いちか君を見れば逝っちゃうのだった。腹ただしい事も忘れて逝っちゃうのだった。

「はあ、はあ、はあ、い、いちか…」

ただの変質者である。

世間の女性たちは如何にかしていちか君を嫁？にしたいと思いい恋焦がれていた。千冬のガードが厳しく家の中でさえ見れないのに、誰もが夜も寝ず、闇夜に穴をえくり覗き込むほど（犯罪ですよね？）夢中になっていた。

「はあ、はあ、いちか君…」

「あの笑顔を見れたらわたしは……」

「着物が乱れたいちか君が見たい……」

変質者が多いようですね。

そんな中、千冬に『いちか君を嫁にしたい』と言う強者が五人現れた。それも色好みと評判の五人。その名は…篠ノ之箒、セシリア・オルコット、鳳鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「千冬さん。いちかを是非、私の嫁に！」

と箒。

「いいえ。わたくしこそがいちか君に相応しいですわ。ですからいちか君はわたくしに！」

とセシリア。

「何言ってるの？いちかはあたしと一緒にいるのが一番いいのよ！」

と鈴。

「そ、そんな事ないよ。い、いちかは僕とが…」

とシャル。

「教官!ではなく、ち、ち、ち、ち、ち、…さん。あ、あの子は私の嫁です。決定事項です!」

とラウラ。

「全員却下!」

「「「「「ええっ!」「」「」「」

「いちかは私のだ。誰にもやらん!」

ブラコンニコに極まれり…あっ、この話では違つな。

「横暴だ！」と五人は言うが千冬も譲らない。見かねた真耶がいちか君に言った。

「いちかくん。あの人はいちか君をお嫁さん？にしたいそうですよ。どうする？」

「うん。じゃあ、僕が見たいものを見せてくれたら、その人のお嫁さんになるよ」

「だ、そうですよ。みなさん」

「「「「「わかった」「」「」「」

五人が笑顔で言うなか。

「だめだあああああああああああああああああああああ！」

千冬の叫びが木霊した。

さて、いちか君が見たいものをそれぞれが取りに行くことになった。

箒は『仏の尊い石の鉢』

セシリアは『銀を根とし真珠を実とする木の枝』

鈴は『火鼠の皮衣』

シャルは『龍の頸に五色に光る珠』

ラウラは『子安の貝』

五人は意気込んで取りに行くのだった。そして時間が過ぎ五人がそれぞれの品物を持ってきたのだが…

「あんた何考えてるのよ！」

ツッコミを箒に入れる鈴。

「な、なんだ？」

「あんたが持つてくるのは仏の尊い石の鉢でしょ」



「そ、そうだが」

「これは、蜂じゃない！ギャグ？ギャグなの？」

「この蜂はみなしごで親を探しているところを無理して来てもらっているのだ。失礼なことを言うな」

「いや…みなしごって…」

みなしごハ チですか？

「全然、見当違いの物を持ってきましたのね。篠ノ之さん」

「そういうセシリアはどうなんだ？」

「わたくしは問題はありませんわ」

そう言って品物を出すセシリア。

「あなたは枝を持ってくるはずでしょ。何で葉っぱなの？」

「何をおしゃいますの。この葉は死人を生き返らせるという世にも珍しい葉ですわよ」

「これ世界の葉でしょ！違うじゃない。あんたは枝を、真珠を実とする木の枝を持ってこないといけないでしょ！」

ドラ エですか？

「そういう鈴さんはどうなのです？」

「あたしは完璧よ！見てみなさい」

と出してきたのは…

「おい…」

冷や汗をかきながら鈴に言う等。

「なによ」

「お前が持つてくるのは火鼠の皮衣だろう？」

「そつよ」

「どこが火鼠だ！夢の国の主人公ではないか！色々忙しいんだぞ！パレードをしたり、ゲームに出たり」

「皮衣つて、皮を剥がないといけないでしょ？そんな可愛そうなことでできないから当人に来てもらったの。無理して来てもらったんだから」

「今すぐに帰ってもらえ！」

「ミ キーマウスですか？」

「み、みんな落ち着いて…」

三人を宥めるシャル。

「そつよいえばあんたはどうなの？」

鈴の質問にシャルは。

「僕は大丈夫だよ！」

自信満々に品物を出すシャル。

「お前……」

「……」

「あなた……」

絶句する三人。

「龍の頸に五色に光る珠を取ってくると聞いたが……」

「これは……」

「ドラゴンボールじゃない！しかも七つ揃ってるし！ある意味一番  
凄いやけど全然違うじゃない！」



「な、何をする」

「な、何をするって…」

「止めるのはあたりまえですわ！」

「あんたが取ってくるのは子安貝でしょ！」

「そうだ。だから…」

「これは声優の　さんだよー」

何か色々とすいません。

五人とも失敗をしたためいちか君を嫁にする話は流れた。そんな感じで時間がまた流れいちか君との別れの時がきた。

千冬が夜空を見ていると、空から巨大なニンジンが落ちてきた。

ズドオオオオオオオ！

「な、何ですか？」

慌てて家から出てくる真耶。そして箒達。この五人は居ついたようです。

墜落したニンジンが開き一人の女性が出てきた。

「箒ちゃん、迎えにきたよ」

ウサ耳をつけた女性が箒に…

「私ではなくいちかを迎えにでしょ！」

女性に拳骨を食らわせる箒。

「痛いよ、箒ちゃん」

「何しにきた？束」

「あっ、ち」

ゴツ！

「ちゅちゃん、痛い」

「何しにきた？」

「つれないな。え〜と篝ちゃんじゃなくて、いっくんを月につれて帰ろうと思って」

「……………却下！……………」

真耶以外の女性が言った。

「でも、この話を終わらせないと本編が始まらないよ？」

「……………はじまらなくてもいい！可愛いちかと一緒に居られるなら！……………」

何て事を言うのでしょうかこの方々は。



「本当にいいの？この話だと、小っちゃいっくんは出演してるけど、大きいっくんは出ないよ」

「……………うっ！」「……………」

「それにヒロイン二人はまだ本編には出てないよ。いいの？」

「……………」

「僕も本編のほうがいい。出番が少ない気がする……」

ぶっくとふくれっ面をするいちか君。

「いちかがそう言うなら」「同じぶしぶ納得するのだった。」

「じゃあ～みんな。バイバイ～」

そう言いながら、ニンジンのロケット？に束と手をつないで乗るいちか君。

「いつくんの事は任せて〜。じゃあ新婚旅行に行ってきます〜」

「……………」な、何を言ったああああああああ！」「……………」

ロケットを止めようとしたがすでに遅く飛んでいってしまった。

「いちかあああああああああああああああ！」

涙を流しながら叫ぶ千冬。そして…

「はっ！」

千冬は自室のベットにいた。

「ゆ、夢か…」

今時、夢落ちですか…

「年も明けたというのに何て夢だ。まさかこれは予知夢？束がいちかを攫うという…」

凄い解釈をする千冬。

「いちかは私のだ！誰にもやらん！そしていちかの（自主規制）もだ！」

拳を天に掲げほえる千冬だったそうなの…

ばんがいへん (後書き)

勢いで書いたのですがいいのか?と思っています。  
次回は本編を書きますのでよろしくお願いします。

だいいゅうわゝ(前書き)

中途半端のところでも終わりましたが次回は短めです。では！

だいじゅわ〜

アリーナ全体に衝撃が走る少し前に戻る…

「くそ。鈴の砲撃、厄介だな。砲弾が見えないのはまだしも、砲身までも見えないのはかなりきつい。ハイパーセンサーに空間の歪み値と大気の流れを探らせているが、これじゃ遅い。紙一重で避ける事が出来ない)」

一夏は《龍咆》の砲撃を何とかかわしながら、鈴に斬撃を仕掛けるが砲撃をかわしながらのためか、攻撃ルートが単調になり、素早く動いて攻撃しても防がれてしまう。

「（くそ…どこかで先手を打たないとな）」

ぎゅっと右手の《雪片式型》を握りしめ千冬の言葉を思い出す。

「『バリアー無効化攻撃』？」

いちか君が聞き返すと千冬は小さく頷く。セシリア戦の後、《雪片》の特殊能力について説明を聞いていた。

「《雪片》の特殊能力だ。（いちかのISスーツ姿：堪らん）」

この人、説明しながら何を考えているのでしょうか。

「（いちかのISスーツ姿：貪りたい衝動が…）」

重症な人物…その名は篠ノ之箒。

えー《雪片》の説明に戻ると、相手のバリアー残量に関係なく本体に直接ダメージを与える事が出来る。しかし特殊攻撃はエネルギー消費が激しいということだ。

「いちか。お前は一つの事を極める方が、向いているさ。なにせ《私の弟》だ（はあ、はあ…）」

私の弟を強調する千冬だった。それからの訓練は近接戦闘と急加速急停止といった基礎移動に費やした。元々は移動、回避など相当なレベルだったがさらに磨きをかけた。そして箒との剣術訓練。基礎は固めているようだ。

「（不利な状況だったとしても気持ちだけは負けない。『強い意志』があれば絶望的な戦いでも一筋の光明を差すはずだ。）」

「一夏！本気でいくわよ」

鈴が言ってきた。

「ああ。俺も本気で行く……」

一夏が真っ直ぐと鈴を見ると何故か鈴の顔が赤くなっていた。そして一気に攻めようとした時、突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

ステージ中央からはもくもくと煙が上がっている。アリーナの遮断シールドを貫通して何かが入ってきたようだ。

「な、なんだ？何が起こって……」

『一夏、試合は中止よ！すぐにピットに戻って！』

鈴が一夏にプライベート・チャンネルで話しかけてきた。



「何を…」

一夏が理由を聞こうとした瞬間、ISのハイパーセンサーが緊急通知を行ってきた。

《ステージ中央に熱源。所属不明のISと断定。ロックされています》

「なっ」

アリーナの遮断シールドはISと同じもので作られている。それを貫通するだけの攻撃力を持った機体が乱入、こちらをロックしている。つまり…ピンチということだ。

『一夏、早く！』

『お前はどつするんだよ？』

『あたしが時間を稼ぐから、その間に逃げなさいよ！』

『女を置いてそんなことできるか！』

『馬鹿！アンタの方が弱い…』

『俺、まだ鈴の攻撃を一度も受けてないけど？』

『くっ…に、逃げ足だけ早くてもだめなのよ！』

自分よりも弱いと言つつもりだった痛みを言えなかつた鈴。

『あたしも最後までやり合つつもりはないわよ。こんな異常事態、すぐに学園の先生達がやってきて事態を…』

『あぶない！』

間一髪、鈴の体を抱きかかえてさうろ。その直後にさっきまでいた空間が熱線で砲撃された。

「ビーム兵器か…しかもセシリアのISより出力が上か。鈴、大丈夫か？」

「……………うん」

一夏の腕の中で急にしおらしくなっている鈴。一夏がどうかしたかと聞こうとした瞬間、煙を晴らすかのようにビームの連射が放たれる。

「ちっ！」

鈴を抱きかかえながらそれをかわす一夏。その射手たるISがふわりと浮かび上がってきた。

「なんなんだ、こいつ…」

姿からして異形だった。深い灰色をしたそのISは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首がない。肩と頭が一体化しているような形をしている。何より特異なのが、その『全身装甲』だった。

「お前、何者だよ」

「……………」

鈴を降ろして問いかけた。当然といえば当然だが謎の乱入者は呼びかけには答えない。

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください。すぐに先生たちがISで…』

真耶が言い終わる前に乱入者は一夏に攻撃を仕掛けてきた。それも接近戦を。

「くっ！速い」

でたために長い腕を器用に使い連続で殴ってくる。しかもその拳は高速回転をしておドリルのようだ。その上、一撃一撃が速く、一夏も防戦一方だった。

「くそ！」

乱入者との距離をとろうと高速移動した瞬間、乱入者は一夏の移動した先にいた。

「なっ！」

スピードは一夏より乱入者の方が速い！

「このまま！」

一夏は瞬時加速しながら斬りかかった。乱入者は一夏の斬撃を拳で防ぎながら一夏に返し技で反撃してきた。

「押されてたまるか！」

一夏も乱入者の攻撃を防ぎ、かわし、返し技で反撃をする。まるで達人同士の戦いのようだ。それも互いに高速移動しながらだ。

「一夏と乱入者を捉えられない……」

鈴は一夏を援護しようと思っているが二人が速すぎて捉えれず이었다。互いの攻撃がぶつかり合う衝撃だけ感じとれていた。

「これが一夏の本気のスピード……さっきまでとは段違いね。それにしてもあの乱入者、一夏ばかりを狙っているわね。あたしには目もくれず。何で？」

鈴は疑問を感じながらも必死に二人を捉えようしていた。

「まっ、そんなことは後で考えればいいか。それよりあたし…中国代表候補生のあたし、鳳鈴音を無視してくれるなんてね！」

鈴は一夏と乱入者との攻撃の衝撃をセンサーで感知して、二人の動きを予測した。

「いくら速くても、動きを予測できれば…あっちね！」

鈴は予測した方に衝撃砲を撃った。鈴の撃った衝撃砲は…

ドゴオオオオオ！

鈴の衝撃砲は乱入者に直撃した。

「さすがだな、鈴！」

一夏は衝撃砲が直撃した乱入者の隙を逃さず斬りかかったが。

ブン！

鈴の衝撃砲を受けたにもかかわらず蹴りをしてきた。脚にはビーム状の刃が出ていた。まるでインフィニット・ジャスティスのようだ。

「くっ！」

その蹴りを雪片式型で防いだが威力が凄まじく後方に吹き飛ばされた。

「一夏、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「悪い！（接近戦では殴るだけと思いこんでいた。くそ！せっかく鈴がチャンスを作ってくれたのに）」

一夏は高速移動しながら乱入者に斬りかかった。

「もしもし？織斑くん？鳳さん？聞いてますー」

真耶は必死に呼びかけているが反応はない。





「そうしたいところだが、これを見る（お前を行かせるなら私が行く。一夏を助けるのは私の役目だ！）」

画面に表示された情報を見ると、この第二アリーナのステータスチエックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定…。しかも、扉がすべてロックされて…。あのISの仕業ですの」

「そのようだ。これでは避難することも救援に向かう事もできないな」

「で、でしたら！緊急事態として政府に助勢を…」

「やっている。現在も三年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる」

「はああ…結局、待っていることしかできないのですね…」

「奴の狙いは一夏だろう。凰には目もくれず一夏だけを狙っている」

「な、なんですって！」

慌てるセシリア。

「な、何故一夏さんを！」

「さてな…（あの乱入者…射撃もできるのに接近戦のみで戦っている。まるで一夏の実力を測っているような。まさか…）」

セシリアが何か言っているが無視をして考えていた。千冬が全く話を聞いてくれないので話を止めたセシリア。そしてある事に気がつく。

「あら？篠ノ之さんはどこへ…」

きよろきよろと周囲を見回すセシリアとは対照的に、千冬だけはさつきまでとは違う異様に鋭い視線をしていた。

「くそ…」

一夏は鈴と連携を組んで戦っている。両者の動きが速くついてこられないため鈴は援護射撃に徹している。しかし衝撃砲もかわされるようになり、一夏の斬撃もまだ当たってない。普通ならかわせるはずのない速度と角度で攻撃をしている。だが、乱入者のISは全身につけたスラスターの出力が尋常だ。零距离から離脱するのに一秒かからない。それがあるから一夏の速さ以上で動けるのだろう。

「（シールドエネルギー残量はまだ大丈夫だが、このまま持久戦をするのは不味い。エネルギーよりさきに体力が危ないな。しかしコイツは…）」

「一夏！」

「おっつ！」

乱入者が接近戦で攻撃を仕掛けてくる。

「（コイツ、俺を狙っている？鈴には牽制をしかけるだけで、特に攻撃はしかけてない。俺が囷に…却下だな。鈴が怒るよなそれは。と言っても斬撃を飛ばす技（名称不詳で月○天衝のようなもの）も相手があそこまで速いとよけられるだけで、無駄にエネルギーを消費するだけ。なら絶対によけられないような…あれなら…でも、あれは威力が高すぎる。人間につ…かう？）」

乱入者の攻撃を弾き後方に下がる一夏。

「なあ、鈴。あいつの動きって機械じみてないか？」

「ISは機械よ」

「そう言つのじゃなくて、あれって本当に人が乗ってるのか？速度とか動き方とか以上だぜ」

「人が乗らなきゃISは動かないわよ（速度で以上なのは一夏もでしょ）」

「そうか？でも…」

「そういえばアレ、一夏にはかり攻撃をしているけどあたしたちが会話しているときって攻撃してこないわね。一夏がどういった戦法でくるか興味があるみたいに…」

思い返すように鈴が今までの一夏と乱入者との戦いを振り返る。

「ううん。でも無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶

対に動かない。そういうものだもの」

「（それは教科書で読んだ。しかし本当にそうかな？今の最先端の研究でそれが不可能かどうかはわからないはずだ。なにせ、そのことを黙っているだけでいいんだからな）」

と考える一夏。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機なら勝てるっていの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく斬り捨てることができる。雪片式型の全力攻撃《零落白夜》を使う。雪片式型の威力は高すぎるからな。訓練や学内対戦で使うわけにはいかないんだ。だが相手が無人機なら……」

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる。いや、斬る！」

そう言って一夏は鞘を出して雪片式型を収めた。

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、ア  
シが無入機だと仮定して攻めましようか」

鈴はにやりと不敵に笑った。

「一夏」

「ん？」

「どづしたらいい？」

「俺が合図したらアイツに向かって衝撃砲を撃ってくれ。最大威力  
で」

「いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ、当たらなくても」

深呼吸をする一夏。

「（零落白夜を俺なりに昇華させてみた。どんなに威力のある一撃でも当たらなければ意味がない。なら避けさせなければいい。瞬時加速で相手の間合いに一瞬で入り、加速を利用した状態での抜刀術で斬るという技だ。相手に防御させる暇も与えない。そして雪片の特殊能力。これが俺の最強の一撃！単純だが動きを読まれても問題はない）」

「準備はいい、一夏？」

「ああ、やって…」

一夏が抜刀体勢に入ろうとした瞬間、アリーナのスピーカーから大声が響いた。

「一夏あつ！」

キーン…とハウリングが尾を引くその声は、箒のものだった。

「な、なにしているんだ、お前…」

「男なら…男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

大声。またキーンとハウリングが起こる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「（まずいー!）」

気がつくと、敵ISは今の館内放送、その発信者に興味を持っただけでなく、銃口をついた腕を箒に向けて、エネルギーをチャージした後、ビームを射撃した。その動作が速く阻止する事が出来なかった一夏。

「何で！箒は関係ないだろう!」

一夏は箒の元に行くため加速した。

「箒を助ける！絶対に!」

一夏自身でも信じられないくらいの加速ができた。その速さは乱入者のビームを抜き、箒のいる中継室の前に辿りついた。そして…

「ぐうううううう!」





叫ぶ篤と鈴。

「一夏さん！」

「織斑くん、織斑くん！」

叫ぶセシリアと呼びかける真耶。

「……………」

無言で拳を握る千冬。拳から少し血が出ている。

「うっ…あ…うっ…」

朦朧とする意識の中で雪片を杖かわりにして何とか立ち上がる一夏。爆発の影響で地面に落ちたようだ。

『バリアー貫通、ダメージ…』

白式が状態を教えてくれてるが、一夏の耳には届いてなかった。

「つか！いち…か！」

中継室の方を見るといくらか破損しているが、筈は無事なようだ。

「何か叫んでいるけど、聞き取れないな…センサーも壊れたか？」

『警告！敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、エネルギー装填』

「終わりかな…まっ、筈を助けられただけでも良かったかな…」

鈴も助けようとしているが乱入者の片方の腕の射撃が激しく助けられないようだ。覚悟を決めて目を瞑る一夏。しかしどれだけ待っても砲撃は撃たれない。変に思い目を開けると…

「あ、あれ？何だこれ…」

一夏の視界が凄くクリア。でそして時間が止まったようだった。

「これはISで見ている視界とは違う。この世界全てが見渡せ把握できるような感覚」

そして見えないものが見えた。例えば鈴の衝撃砲だ。砲身も砲弾も見えない筈なのに見えるようだ。

「あれが衝撃砲…光の粒子を放ってるようだ。でも止まってるのか？」

乱入者を見る一夏。

「アイツも止まって見える。いや、僅かだけ動いてるのか。ん？」

「（一夏！）」

「あれ？筈の音が聞こえる。センサーは壊れているんじゃないや、違う。聞こえるじゃないやなくて、心に響いてるっていつか…あっ、他にも…」

「（一夏！）」

「（一夏さん！）」

「（織斑くん！）」

「（一夏…）」

「みんなの声…想いが聞こえるのか？みんな俺の事を本当に心配してくれてるのがわかる」

「（一夏お兄ちゃん…）」

「誰だ？」

「（僕はいちかだよ）」

「一夏は俺だ」

「（でも、僕もいちかだよ）」

「え？」

「お兄ちゃんも一夏。僕もいちかだよ」

「君は小さい俺…か？」

「うん。そうだよ！」

「何で、この感覚ってどうか、世界は？何で小さい俺と話が？」

混乱する一夏。

「わかんない。でも僕達は話せるよ」

「あ、ああ」

「一夏お兄ちゃん！」

「な、何ですか？」

何故か敬語になる一夏。

「(何であきらめちゃうの！まだ一夏お兄ちゃんは戦えるでしょ！)  
」

「あ、はい。すいません」

何故か敬語で謝る一夏。

「(ここであきらめて一夏お兄ちゃんに何かあったらみんなが悲しむよ。篝お姉ちゃん、セシリアお姉ちゃん、鈴お姉ちゃん、千冬お姉ちゃん、真耶先生。それだけじゃないよ。クラスのお姉ちゃん達みんなが悲しむよ。一夏お兄ちゃんはそれでいいの?)」

「.....」

「(よくないよね。だからあきらめないで!)」

「.....まさか、小さい自分に叱咤激励されるなんて夢にも思わなかった」

「(一夏お兄ちゃんがだらしないからだよ)」

「だな...じゃあカツコイイところを見てもらうかな!」

「(うん!)」

一夏は雪片を構えた。

「でも、この感覚というか世界というか、こんな状態で戦えるか？」

「(大丈夫だよ)」

「えっ？」

「(僕も一緒に戦うから)」

「……そっか。じゃあ二人で戦うか！」

「(うん!)」

「いくぜ、いちか！」

「(うん、一夏お兄ちゃん)」



一夏は乱入者に向かつて斬りかかる。先っきよりも体が軽く感じる。乱入者はやっとなビームを撃った。

「（一夏お兄ちゃん。大した事ないよ、あんなの！）」

「ああ！」

一夏はそれを、ビームを片手で弾き返した。

「ビームが遅すぎるから反応が遅れるかと思った」

「（いちかお兄ちゃん！アイツ、パンチを）」

敵が何をするかいちか君が先読みをして教えてくれる。まるで予知しているようだ。そして体が信じられないほど軽く、力が湧いてくる。何も出来ない事がないと思えるくらいだ。その上、周りの時間がゆっくりと流れているようだ。みんなの想いまで感じとれる。

一夏は乱入者の拳を指で止めた。スローで何発も攻撃を仕掛けてくるがすべて指一本で止めた。

「何かわからないけど凄い！負ける気がしないな」

「（うん！僕と一夏お兄ちゃんが一緒に戦えば）」

「無敵だ（ね）」

「な、何だ急に一夏の速さが、いや強さが…白式にあんな力が！それとも一夏の…」

急激な白式の一夏の変化に驚いている千冬。

「織斑くんのエネルギー残量や他の数値も変化はないです。でも…」

「あの乱入者を圧倒していますわ」

セシリアと真耶も一夏の急激なパワーアップ？に驚いていた。

「一夏…」

「一夏、凄い…」

箒と鈴も一夏の強さに驚いていた。

「さあ、決着をつけるぞ。いちか」

「(うん。わかったよ!)」

乱入者が右手で攻撃をしようとした時、

「(一夏お兄ちゃん!)」

「ああ!」

乱入者が行動に移る前に一夏は乱入者の右腕を切り落とした。

「(今度は左手からビームだよ!)」

「わかった!」

左手から出たビームを雪片で弾きかえした。

「(一夏お兄ちゃん、今度はキックだよ)」

「了解!」

ビーム状の刃が出た蹴りをしてきた。それを一夏も蹴りで返した。本来なら一夏の蹴りの方が負けるはずだが、負けたのは乱入者だった。白式的能力が上がっている？

「これで!」

「(決めるよ!)」

一夏は雪片の上に構えた。そして雪片が強く光輝く。その光はさらに強く輝き始めた。

「「零落白夜」」

一夏は雪片を鞘に収め、一気に乱入者の間合いに入った。乱入者は何かしようとするが…

「「遅い！」」

一夏の抜刀術、そして零落白夜が決まった。そのまま乱入者は粉々になった。威力がありすぎたためかアリーナの遮断シールドを破壊していた。

「やつ…た…」

一夏はそのまま意識を失った。

## だいじゅうわく（後書き）

予定では一巻分終わらせるつもりが出来なかった。次回で一巻分は終わりますのでよろしくお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7769y/>

---

IS いちか君と一夏のIS学園生活

2012年1月4日00時15分発行